

## 「0.0 靈魂魔靈病 0.0」第一章 近しき猫たち

「僕たちの世界の終わり」という名の円盤に幻想夢想家である僕の魂は入っていて、空高く見上げながら、ぐるりぐるりと廻って行く。一つ目の怪物が僕を食べ始めた時、恋人たちは狼狽えて脚は竦み震えへなへなと腰を地に下ろし口々に「もうだめだ」と唱えた。食べられている僕の方とは云々と、これは玄妙不測にして食べられていくのを感じながら、これまた聡明な意識を保ち、足先にあったはずの爆弾を裸足の足先の爪先で手繰り寄せようと足掻いていた。そう、僕にだって足先はあるのだ。それを使って何が悪い、と悪態をつく思いを抱えながら、神妙な表情で爆弾を何とか足指に寄せると、食べられていく内臓に顔を寄せる一つ目の怪物に気づかれぬようにしてこれまた足指でマツチを擦り、導火線に火をつけ、僕の内臓と共に彼の口中に放り込み、奴がぐくと音を鳴らして飲み込むのを確認してから飲み込まれつつある内臓を千切って僕の主要な本体だけで崖下に転がり落ちた。内臓がぐちゃぐちゃになりながら死からの逃走を図った僕は、爆発音と共に五体が爆散した謎の存在から飛んできたもはや光を失った一つ目が、丸く組んだ両足の間にすっぽりと嵌ったところで意識を失った。

気づいた処は病院で、恋人Aと恋人Bと恋人Cが共に僕の側に居てくれて、AとBはそれぞれ僕の右手と左手を握り、Cは僕の左足を撫でてくれていた。元々複製しておいた体が役に立ち、僕の五体は繋がっていて内臓もスッキリスラッと収まっている。嗚呼、温かい意識の流れ込む心地良さ。僕は三者三様の恋人たちを愛しく思い、一人一人のことを改めて認識した。Aは僕を愛してくる。Bは僕を尊重してくれる。Cは僕を快くしてくれる。みんな大事な恋人だ。彼女たちとの幸福な暮らしが送れるだけで僕は十分に報われた人生を歩んでいられるというのに、まったく厄介なことに、僕の周りには絶えず人で無いものがうろつき、襲いかかってくることもある。僕らの暮らしは幽霊でいっぱいだ。ただ、僕らを襲ってくる幽霊はかなりお茶目で悪戯で、僕たちを陥れたかと思いきや、笑いながら突如シリラスに転じて人生の命題を突き付けたりもする。生きるに値する意味や存在の確かさを求め掴み抗って、生きる価値の無い自分を求めさせようと、満たされなさを他者に償わせようと、強いては嫌われ離れられ、胡乱な不毛な無為をあらまし、たらふく食べよう、桃太郎。

桃太郎の霊は僕の子飼いで、彼から桃を一つ頂いて、恋人たちからマツサージされながら、うとうとと眠りについた。僕は幸福だ。不幸にして早逝した者たちに悪いと思いつながら、今生きていることへの感謝が胸いっぱい広がった。

そうこうする度に僕は因果の輪から外れ外れて廻らぬ道へ、迷い迷って外

道の絆へ、因果応報嫌われ世界よ、抗って誤って謝って、許されるべくもなく、そうして阻害され、憎悪して、悪しき魂へと変じた。なんということだ、全く油断もすきも有りはしない。変化魍魎、魑魅跋扈、それが実態、それが絶対。僕らの街の胡乱なところは今、彼ら厭われる幽霊たちに侵食されている。それらを忘れて過ごせはしない、そんな聖者として僕は生きたい。願ひ叶えて歩いて回るが僕の役目で、職能で、起きた出来事を箇条書きで八千字以内に書き起こさなければならぬと本能が命ずる僕であって、それが普段の過ごし方で、そんな僕をこそ良いと思う人々に支えられて成り立たされて僕はいる。

ふと、第四の四肢であるところの右足が摩られているのを感じる。ABCの三人は間に合ってるし、じゃあ残ったはずの右足へ誰がどうしてどうやって愛を注いでくれているのだ。するとそこには白衣の女性が。両手を添えて右脚を舐めるその姿はまさしく女医であり、これはなんの治療か、はたまた巫山戯ているのか、さもなくば僕には未知の文化的作法でもって礼を尽くす理のあらましかもしれぬ。見様見真似でその舌捌きをペロリペロリとラーニングすると、四人は揃って左足を投げ出してくる。順繰りに舐めていくことで、世界は循環され、僕の肝臓に彼女らのエキスが蓄えられていく。すると世界から顕示があった。

「深化した意識の底から自分の全てを吐き出すように息を吐いて、吸って、吐いて、吸って、吸ったら好いて、スイッと吸うて、吐いたら穿いて、剥いたら灰だらけ。ハイハイ。それじゃあ吐いて吐き戻してくださいね。そうすることであなたの名前は紫色に染まる。紫芋染之丞（むらさきいも そめのじょう）と名付けよう。それは吐き戻されるまで保留の名前、名付けられるまでに完遂へと到れる力を持たないままではあなたに名前が付けられません。だから今のところあなたに名前は無いのです」

僕の名前は秘密であれど、僕はその声を神の声と受け取ったが、実は聖なる霊の声かも知れず、そうであつたなら僕はその声を信ずるに能わずという訳で、しかし、けれど、それでも僕は、僕に名前を付けてくれる者を信じたい気持ちに包まれていた。僕の心はそんな幸福な幻想を必要とする程までに居た堪れない思いに傷ついていて、折りも悪く人体を両断できる大きさの鋏を持っていたものだから、これからついでに人々を切り刻んだりしてもいいのかもしれないな、などと思つていたところだったのだ。けれどそれでは、僕に名前は付けて貰えない。ただひたすら、吐いて、吸って、吐いて、吸って、吸ったら好いて、スイッと吸って、吐いたら穿いて、剥いたら灰だらけ、這い這いしてから吐いて吐き戻さねばならないことになってしまうのだ。手順に誤りがあつては僕は名前を得られない。だから僕は名前を得ることが出来ず、もどかしく狂おしく、嗚呼、安楽な死を以つてこの苦しみを追いやつてくだらないか、と滔々と揚々と頼んではみたけれど、聞き入れてくれるもの能わず、丸みを帯びた風鈴が暴風でチリンチリンチリンチリンと叫び劈く僕の耳の鼓膜は、裂けて破けて何も聞こえなくなった。

三人の恋人と一人の女医に礼を言うと、一人ずつ丁寧なお辞儀と握手を得て、それが終わると勢揃いで拍手の儀式が執り行われた。細かく早く打ち鳴らされるその拍手の音は、されど僕の耳にどれだけ近づけても聞こえることなく無音の世界、四人の口がパクパクと鯉の口、四つの口はグルグル回って僕の目を回し、だんだんと一つに融合したその口に吸い込まれた僕は、奥へ奥へと依頼人の待つ部屋へチューブを伝って送られた。

「もし！　もし！　お頼み申す！　わたくしの臍の下に幽霊が湧いておりんすの」

僕の隠された名前の中にそれはきつとあったのだらう。僕の耳には届いたり届かなかったりして、ふと気づいた時には何を言われたのかわからないままの空間が処理され解離から帰還した正常な意識へと回帰していた。されど目の前のありんすからは僕が何をしたのか認識されておらず、ただ僕が解離している間に言われたであろう彼女の言葉が僕には届いていなかったことへの不信が僕へと流れ込むばかりであって、僕には彼女の臍の下に幽霊が湧いていることなど一向に知る由もないのだった。されど僕は彼女の臍の下に幽霊が湧いていることを感知している気がしてもいた。これはひとえに解離中の無意識に近い譫妄状態であっても自らの感覚器官、特に今回は五感のうち今は使えないはずの聴覚に受けた刺激については、無意識中の意識とでも言うようなものが働いており、無意識であるにも関わらず意識に情報が残されたというような作用が働いたのかもしれない。そんな気がしないでもなく、そうだとしたら何も意識されなまま、僕は無意識を処理することの出来る超人ということになる。これは素晴らしい未来への福音だ。喜ぶ気持ちが出てきた。ボクの能力の中にある、記憶と感覚と感情と、解離から帰還した電気で脳の芯から痺れたような跡に残るシャンビリ様の感覚刺激の後味に、僕はこれこそ天啓か、気が触れたことそのものか、神懸りだか、憑依の時か、そういった何らかの異常事態が自分の身に起こったのだと、確信せざるを得なかった。僕はミニチュアアシユナウザーの足跡を舐め取ってペタリペタリと懊悩する舌を垂らした趣味人の仲間入りをしたのだ。そう思うとひとえに僕が生まれてきたことが如何にも呪わしい様であり、恥ずかしいことであり、醜いことであり、それ故に誰よりも美しいものであると確信せざるを得なかった。みっともない我が身のみっともなさこそが、何よりこの世界で美しいものであることを、僕は否応もなく感じざるを得ないのだった。

僕が自己に陶醉している間、ありんすのお人は眼前に居りんすからして、僕は彼女の苦悩懊悩を感知してあげる親切な人たるべきであつたらうことを察し、いつかその様な健全たる優しさ愛おしさ狂おしき愛らしさそして親切心というよりは社会福祉愛とでも言うべき深刻な宗教的信仰心に基づく神への愛と同等の愛を彼女ありんすに齎せたならば良かったなと思うばかりで腹は空き、学食なぞに食べに行こうとその場を後にしたらば後から、

「ありんすはおりんす！　ありんすはおりんすする！」と叫ばれて、はたとその存在を思い出した。やれやれ、僕はまた、とんでもない失態を冒すと

ころだったな。僕に何らかを求める者を置き去りにするところだった。僕はすっかり改心し、横に伏して泣くありんすの彼女を縦にして立たせ、その下腹部に宿る霊へと心を込めて珈琲十六杯を口に含んでは吐きかけ口に含んでは吐きかけ至る所が真っ黒になるまでありんすの衣服を染め上げた。彼女は着物を着ていたけれど、十六杯の珈琲の黒さはそこに地図のような模様を作った。

「これは小児のお漏らし様の天性の出来を誇る立派な仕上がりに。どんな芸術の専門家であろうとこういった天の采配としか言いようのない出来に敵うものはない」

と僕が言っただけで満足しながら立ち去ろうとすると、ありんすはヒイヒイ言いながら目を見開き叫んで僕を見つめ、

「あちきのありんすの幽霊の靈魂を、魂鎮め、いたしてくれなかるうかとですかいな、そないな殺生な、ご無体な、ええ、ええ、あてくしを蔑視なさつてお見捨てになられはるのんですか、そないなこと、うちは、うちは、信じられはらますですすねん、こないなこと、信じられはらませらますまらはられませすまねん、まるであてくしに、あらはらすれすまらませすませませまどすまらせんね、ああ、ああ、あちきは、あてしは、ありんすでおりんす」

そう縋り付いてくるので気味悪くなり、

「ええい、でやったな悪霊め、退治してくれる桃太郎」

僕は桃太郎となつて悪魔を退治することではなく、桃太郎そのものを退治することをいつの間にか決意しており、目の前のおりんすが、僕の子飼いの桃太郎に取り憑かれたのであると錯誤錯乱ぶなしめじ、食い散らかして突散らかしてえいのえいのやあやあ、とっぴんぱらりのぷうとなり、彼女の臍から腹の中へと右手を差し入れた。ドクリ。彼女の腹中の血流は滾り、圧力をかけて僕の手に絡みついてくる。血が、僕の右手を締め付ける。それはまるで、大蛇に締め付けられる大根がベキベキと音を立てて潰されて、潰物にされてしまうのにも似た光景だった。僕を心配した恋人たちが四人、僕に取りすがる。うんとこしょ、どっこいしょ。トルストイの名著のようにしてくれるのかと思いきや、彼女たちはめいめいの思うがままの儀式を始めた。♫は僕に口付けをし、♫は声援と共に僕を見守り、♫は腰を振り、いつの間にか恋人になっていた女医こと♫は僕に輸血をした。それぞれがそれぞれの信ずる道理を以って、僕に貢献してくれるのだった。そうこうするうちに、僕の右手は痛すぎて耐えられなくなってきた。僕は「がぎ、ぐげー」と叫び声を上げてもんどりうって地べたに寝そべり両足をジタバタと大地に叩きつける。すると反動で右手はありんすのおりんすをプリンスなペリンスでパリンスと割ったらアヒルが出たよ。そのアヒルこそが、おお、神だ、神霊だ。ありんすの中から生まれた神はありんすの力を殆ど受け継いでいるようで、僕の右手を引き締めていたありんすの力は弱まって、臓腑の血流は既に緩み、僕の腕はぬるりと引き抜けた。その血塗れの腕をアヒル神へと突きつけて僕

は言う。

「神よ！ そなたの母を助けよ！ 母へと慈愛を注ぐのだ！ さすればお前に人望は集まり！ 神として衆生を惹きつけずにはおられないだろう！ さあ！」

神はその僕の言葉に反感を抱いた様子で、僕を「グワ！」と一喝すると、ピヨピヨと羽ばたいて天へと還っていった。不味いことをしてしまったな、と後悔の念が浮かぶ。僕の腹中に取り返しのつかない結果によって、泥泥とした泥濘みのような汚泥まみれの腐汁と化し、いてもたってもおられず口から梨汁様の吐瀉物が吐き出された。それは喉を焼き口中を痺れさせくぐもつた声を僕に発させた。「ぐげえ」。紫色の濃淡が混じった吐瀉汁はグニグニと蠢き、かつて筒井康隆が著書でその存在を露わにした反吐評論家であってもそんなものは見たことがないと言わしめなくもなさそうな体様を成している。蠢きを続けながら徐々に液体から固体へとその様を移す謎の物体は、どんどん増殖し体積を増やし、やがて立体としてその場に直立するに至った。世界はこの世に新たな異形の生命体を生み出したのだ。後の世へと伝承される賢人である僕は、かく語った。

「それはかつてない神秘。得体の知れない紫色の何者かを吐いて吐き戻したこの僕は、そうすることで謎の名前を紫色に染めたのだ。紫芋染之丞（むらさきいも そめのじょう）、今ここでかく襲名し、今ここにかく見参なりけり！」

僕を取り囲む恋人たちと謎の直立する生物、瀕死のありんすと無窮の天上から見下ろしているであろうアヒル神、そして言及されることもなかった有象無象その他の霊どもによって形成された合意空間は、今割れんばかりの拍手と歓声を以て紫の芋を祝福した。

「ありがとう、ありがとう。僕たち私たちは今ここで神への感謝をアヒルに捧げん」

地べたにへばりつく姿勢をとった僕はケロケロと泣き喚き、甘く煮凝った吐息を吐くと、僕に関わった靈魂魔どもは吹き飛ばされていった。靈魂魔とは、靈魂によって構成された魔であろうか、はたまた魔の取り憑いた靈魂であるうか。その実体は解明されておらず、ただひたすら妖しくふしだらで淫らな心を掻き乱す仕草で人間を悪戯に悶えさせ、気絶に至らしめ、その後は死すら招かざるを得ない場の位相の特異なる様相容貌、凝縮濃縮惨澹たる奇禍を起こすことこの上無しと言う他無い。物質ではなく縁の偏った位相であり、人の世の隙間から人間を侵食し取り憑いて取って喰う恐るべき世界の抱える過ちであり、それに僕はかろうじて些細な抵抗をしているに過ぎない。だがそれで災いは去ったのだろうか、はたまた場の煮凝りは僕にさらなる災いを齎すのだろうか。

「これで靈病は癒えるだろうか」

眩きながら僕はそのようにSNSに書き込んだ。不承不承やったことなれど、僕の周りからは様々な存在が吹き消えてしまい、僕の心の奥底にあった

温かい、人を想う気持ち、人を慕う気持ち、人の温もりの記憶、様々なそれらがまるで幻だったかのような空恐ろしい解離を引き起こし、僕の、私の、あなたの君の、黄身の剥き身の浮腫の果ての、荒寥とした砂漠にも似た心境は、ただ寂しく、報われず、置いてけぼりにされた飼い猫の怯え声にも似た眩きがただ其処此処に残響し、手足は震え、身震いし、大地は鳴動し、裂け、世界は全て飲み込まれ反転していく。日本が、世界が、大地が海が、宇宙も、銀河もその果ても、全てが飲まれ尽くしたところで目が覚めた。これは夢か、真か。僕の目の前には恋人たちがいて部屋に数あるソファで寛ぎ、ありんすでありんすところの神の母もその群に加わっていた。その光景はさながら牧場で、優雅にソファ状の草藁に沈む動物たちといった趣だった。牛が、そこにいることに気づいた者はどれだけいただろう。僕の恋人たちに混じって悠然と横たわり寝息を立てる茶色いジャージー乳牛の出処について気になる者は僕の他に居らず、僕の遭遇しているこの現象は岩礁に乗り上げている。

「めぐ子や、お前の乳を搾らせておくれ、日々の糧を与えておくれ、それによって我らが部屋は喜びに溢れ、我らが床はミルクに塗れるだろう。それによって生きとし生けるものは乳牛を崇め、奉り、乳牛の霊を胸に抱きながらスヤスヤと眠るだろう。それによって平和は実現し、遍く世界で不眠の不満は不問に付されるであろう。安心安全、甘えの気持ちは報われて、赤ちゃんと化した大人の男女はオギャオギャと泣き喚き、バブバブルとバブリシャス、ペロンチヨの驚きに喜んで、ヒヤーと声を上げて飛び上がるだろう。その時、我々の願いし人の幸福は成就し、アイスメロンを食べないではいられなくなる。アイスメロンを食べる赤ちゃん様の大人たちは、チュツパチュツパと音を轟かせ、大地は裂け、鳴動し、地の底に天空は吸い込まれ、天地は逆転し、地の底に隠された世界は表側へと裏返し、モグラ人間が世界を大っぴらに謳歌するのだ」

めぐ子の乳を飲んだモグラ人間たちはかつてこの地に赴いた宇宙の果てのそのまた先の謎の異星人かもしれない。けれど敢えてその説を力説するつもりは無い。何故ならそんなことは多様な可能性の一つとして決して誰にも否定し得ないものだからだ。鮮明なる記憶に従って、僕は霊の存在を思い出す。もぐら人間、幽霊説。僕の記憶の奥底に、ついさっきまで対峙していた霊魂魔の姿がありありと蘇る。いつの間にか失われた視力によって見たこともないはずのその霊魂魔をどうして僕は思い起こせるのかさっぱりわからないうが、その姿は僕の脳裏に閃いて鮮明に浮かび上がる。その姿はかつ消え、かつ結びて、久しく留まりたる試しの無い方丈記。これぞ霊であり、一同へと礼するものである。お辞儀しながら僕への敬いを表す僕の恋人たち一同及び霊御一行様は、僕の元へと集って絶え間ない喜びを僕に与えてくれた。天国への階段を昇って昇天した僕は、神の玉座から地球を見やる。青い青い地球を見ながら、お風呂に入りたい、と思った。それこそが、地球を見て初めて思う僕の素直な気持ちだった。天国の浴槽というのは入って浸かれて体を

ジャブジャブ洗えるものなので、僕は非常に気持ちが良い。すーっとした心持ちと、棺桶にも似た安らぎの心境が得られ、いつ何時でも体を触って実体の実感を確かめられる安心安全快適なボディソーシャルの依代なのだった。身体があるということは自分が霊体ではないということを確認められるということ、それによって自分はまだ現世に属する生体なのだ実感があるという結論に至れるかは、種々の客観的な観測によってもたらされる確認作業というものが一つの実測としての確かさなのだろうけれど、僕には未だに不承不承ながらわからないこの世界の法則と実測と不釣り合いな俄か根性で周囲の人々も庭には二羽鶏が俄かにニカワを塗っていて、ニカウさんと呼ばれた人が大挙して迫り来る光景が目に見えぬ。向井さんはニカウさんと挨拶を交わし、ニカワに皮に鱈可愛いに、川に怖い兄い、コワニ蟹、和歌に判りにくい代りに、輪っか日課に使われずに怖いアニメにめっかって、三つ買って、もっと買って、儲かりまっかかと尋ねてみても、もう帰りましたと返答が来る。「まあ帰ったの」と振り返っても、真っ赤っかだのと笑い出す。ボーン、ボーン、鳴る柱時計に映る僕の影。それは霊で、それこそ霊で、僕の周りから雲散霧消したはずの何某かはセンスを込めて扇子に吸い込まれる。三毛や、三下り半や、蜜柑や見かけや三日三晩や、見え見えのミニスカートで扇情的に男たちを誑かす振る舞いや、舞妓に則って迷子にマイコーディネイトしてもらって、滅法強い神通力で霊へと交信するのだった。そうすることで僕の磁場は安定し、不可思議な霊たちによる靈魂魔は靈病となって、霊の世界へと帰還する。帰還した霊はさらなる思い、望みによって、新たな人の魂へと帰還し、赤ちゃんとしてこの世界へと生まれ入るのだ。それこそが、めぐりめぐり、僕の娘、息子、あるいは赤ちゃん、その人なのだ。

僕の試みを把握している僕の恋人の群れの中に、羨望の眼差しを持つ見慣れぬ者がいる。

「先生、あの、私のこと、お忘れですか？ 私はいつもいつまでも先生の従順な教え子・召使い・恋人、そしてミュージックなファム・ファタール。そんな私の望む世界は、難しい前提に則らず、這々の体で這い出して、焼き鳥を食べ、飲み、一本十円に抑えてくれたその値段に感謝しながら読了するまで漫画を読み耽る世界。片手に漫画、片手に焼き鳥、グラスのお酒は器用に歯だけで縁を啜って持ち上げて、その都度適量を口中に流し込む。そんな器用な私を愛してくれる先生を、私はお慕い申しております。そして私の愛は宇宙より広い。いいえ府中より。夢中になって、渦中の栗で、忌中の喪中で地中の途中。越中富山の薬売り。しょっちゅう剥かれるかさぶたの傷。今宵は私と共に淫らな霊として共に過ごそうではありませんか、ねえ、先生」

先生であるところの恋人であり変人でもある僕は、彼女であると感じ受けられる素振りを見て、彼女はタイプDであることと観測された。彼女の言いつ不可思議な文言を脳裏に掠めつつ彼女の顔をまじまじと見ていた。そこには宇宙があり、府中があった。夢中で見ている彼女の口元はもごもごと呪文を唱え

るように蠢いて、されど意味は一片も伝わってはこない。瞳はどこまでも吸い込まれるような深奥で、無限大の宇宙そのものだ。やがてその黒目に吸い込まれた僕は、驚きよりも早く息を止め、酸素の確保に務めるのだった。しかし僕の努力も虚しく酸素はすぐに足りなくなり、思わず口を開いて息を吸ってしまった。僕はそこで溺れ死ぬことを覚悟していたのだけれど、怖さによって瞑っていた目を開いたところなんともなく、そこは至って普通の日常と変わることのない幻の現実が広がっていた。

幻の現実斜に構えていて、僕らを至って普通にせしめるばかりで、何も面白いことはしてくれない。そんな世界はつまらない。僕は張り切って世界を壊し始めた。僕の生まれた世界の霊を召喚し、阿鼻叫喚の地獄絵図へと塗り替えたのだ。ものの5分で世界は壊れ、世界中の世界が、中世界の中に取って代わられて、キラキラと煌めいて砕け散っていった。その綺麗な光景にうっとりしながら、僕は唱えた。

「宇宙より広き府中よ、今この僕の為に顕現し、自らの周囲に東京都そして日本及び海さらには諸外国を形成し、宇宙を培い給え」

府中は宇宙の中心として顕現し、そこにはちゃんと神社が齎された。神社とは神の社であり、霊という概念と競合するものではない。神は神であり、霊は霊なのだ。そして僕の霊は神として神社に祀られた。その社に参拝に来た者たちに、僕は加護を齎すこととなったのだった。

僕は参拝に来た者たちを神の子と定めた。神の子には亀の子束子（たわし）よりも神の子束子が相応しい。それによって天下泰平が齎されるのだ。

齎し、桃を垂らし、桃太郎する。神、神の子束子売るの巻。つまり桃太郎は神の子束子を使い、桃を束子で洗うのだ。そうして洗われた桃に乗った僕は旅をして、配下となっている桃太郎をいのように使い、鬼ヶ島へと旅に出た。まま、ママになって島の鬼に優しさを振りまいて、桃の太郎を成敗すると、鬼たちの楽園は尊重され、犬・猿・雉は自らを火に焚べて肉を焼き、鬼たちへの供物となった。鬼たちはその崇高な魂に尊厳を見出し、神の社へ犬・猿・雉を祀った。桃の太郎は、小さな祠に地蔵として小規模に祀られた。こちらの肉は自ら供された訳でなく、僕という調理の民によって三枚に下ろされ刺し身にして山葵で食われた。桃の味がした。桃には腿もあったし、腿肉も桃の味で、モーモー牛の鳴く声もどこからか聞こえてきた。牛は鬼たちを跨いで通ると、僕の霊をかっさらって駆け抜けていった。これはまづい。肉は不味くない。それによって霊を取り戻さねばならぬから、僕は仕方なく鬼の社に祀られた犬・猿・雉と桃太郎の霊を召喚し、彼らを背に乗せて駆けてった。府中から天竺を駆け抜けてワルシヤワを経た後、イエーテボリでお昼寝し、ヘルシンキで買い物をした後、イルクーツクで小銭を落とし、たことに気づかないまま神保町へと辿り着いた。酸性度書店前に佇みながらどこかで小銭を落としたことに気づいたけれど、どこに落としたのか分からない。けれど僕はそれがイルクーツクだったと直感的に把握していて、だからといってそれが何故かは解らない。しかして僕はイルクーツクのことなど



考えもしていないし、意識にイルクーツクのことなど微塵も介在しないのだ。

将棋を指したくなった僕は、牛に攫われたはずなのになぜか懐に回帰していた霊を撫で擦ると、魂となった桃と太郎を組み合わせ、再び桃太郎を成立させ、魂であるところの彼に仮初めの肉体を与えた。これが世にいう再誕である。犬は狂犬病に罹り、猿は木から落下し、雉は鳴いて撃たれた。悲しみに暮れる中、僕は将棋を指し始めた。

「初手、一六歩」

宣言してから盤と駒を買い求める。それらを取り扱うA菓子屋書店まで少しある。ええい面倒だ、オークションアプリで最安値の逸品を落札すると、到着するまで四日間、駿河台下の交差点で待ち続けることにした。5分過ぎ、30分過ぎ、1時間、6時間、12時間、一日経った。待てども待てども届かない盤駒のことを思うと、ついついA菓子屋まで行きたくなくなってしまつ。しかしそんなことをすると、落札したものがその後が届き、僕は不要な一揃えを無駄にもう一組所有しなければならなくなってしまつ。これは負債にも等しいものであり、決して財産と呼べるものではない。そんな負債を負うことは絶対に嫌だという一心で、僕は駿河台下の交差点に四日間滞在したという訳だ。その間、僕の周囲には恋人たち、友人たち、見物人、生き別れの妹、居もしない姉、その百合の相手、妹の子供たち、死んだはずの飼い猫、籠のまま連れ出された兎、加護のママ、付け足された鰻、恋人の足に絡みつく蛇のような女装レイヤー、変人の兄に絡みつく鉈のような男装ヘイター、暗闇に眩むクرائمサスペンス、英語で謝罪する総理、毛糸に敬服する慶子、搔巻を買いまくる怪盗、などが現れ、僕を楽しませた。彼らの言い分によると、僕は警察にデモの届け出をして了承され、安全を保たれている状況なのだそう。僕はそんなことをした覚えは無いのだがそういうことになっている。ということつまり、公安警察の仕事をする祖父がなんらかの働きかけをしたのだらう。確かめはしないが多分そういうことなのだ。確かめてしまった結果、もしその通りだとしたら、僕は祖父に礼を言わねばならないような気がしてしまい、そんな気がしてしまつたからには自尊心と独立心が萎びてしまうことになる。そんな心無い思いをしなければならぬ。僕は僕には無いし、そんな風に思わせたとしたら祖父は僕に詫びた上、割腹自殺でもしかねない。祖父が割腹自殺などするような、そんな殊勝な人間でないことを僕は十二分に知っているが、そんなことでもしかねないと思つてあげたい僕の気持ちによると、僕に相応しい祖父とはそういう風に割腹するものなのだ。そんな思いに基づいた、そんな事態を避けるためにも、僕は祖父の所業については一言も詮索しないのだと固く心に誓うのだった。そんな思いを胸に巡らす僕のしみじみとした、得も言われぬ、渋みを噛みしめながらも恍惚の入り混じった表情を見て、周囲の人々はさも深遠な宇宙の命題と地球の存亡について僕が考えているかのような憶測を繰り広げながら、ざわざわとざわめき立って、色とりどりの曼珠沙華を僕へと捧げるのだった。曼珠沙華に

そんなにも色の変種があるうとは僕は知らなかったが、それらは決して現世では存在し得ないであろう色が多く、浅学なる僕の博識を持ってするとそこにそれが存在するという奇跡なるミラクルオラクルは異常なる敬意に相応しいものであるが、当の僕はそんなことは知りもしないし気付きもしないので、有難がりもせずにとただただ受け取った。すると不思議なことに、僕を取り囲んだ人々は手を繋ぎ、廻りだし、口々に違う歌を歌いだした。

「安産になれ、兄（あん）さん担え、安全に苗」

「録音技師にロックオン、ギシギシアンアン録音」

「救急車がキュッキュキュー」

「牧草地で草を食べたら牛になりました」

「明朗会計動物病院、いろいろ買いてえ唐突承認」

「ヤンキーはファンキー、モンキーはラッキー」

「クレオパトラとクレオとパトラとテトラとトキシンと独身」

などの多種多様な歌詞が複雑な変拍子のリズムに乗って僕に成り代わって祖父の名代を告げた。祖父というのは母方の祖父であって父無し子だった僕にとってそれは当然のことなのだけれど、どういうわけだか父方の祖父のことだと思いこむ人がいて、そんな人間は歩か二歩ラム（若い羊肉）で祓いたいわけだが、生憎未だに駒は届かない。駒と盤が同時に届くとは限らないので僕は早くどちらも届きますように、と願い奉った。鬼たちの願い、叶えてやらなければ。との使命が天から降って湧いた僕は、その場を見物人に預け、一目散に鬼の願いである祖国への帰還を嘆願する勢力として役所に届け出て、言った。

「お兄さん、鬼さんを知ってるかい？ 僕はその鬼さんをおにぎりさんへと変換すべく、ある装置を開発しているんだ。その名は僕のお気に入りで、大きな栗だった。ビックリ、という名の栗を以て、モツツアレラ、を、持ってられた。栗とモツツアレラチーズを使ったおにぎり・おにぎる・おにぎらず、大体の損益を数えると嫌になるからおにぎり屋を開かないことにしたため、本国の収益は無へと帰したのさ」

役所では僕の文言を解する者は無く、仕方なしに役人を一人一人問い詰めては首にストローを刺しチューチューと血を吸っていった。恐れおののいて逃げ出す役人の群れは編隊となって次から次へと役所の出入り口から精鋭の青い飛行隊のように逃げ出していった。役所には到底納まりようの無い人数が玄関から外へ逃げていって、その様は召喚された悪魔が魔界から滾々と湧いて出てくるかのように思えた。僕が内部で逃げ遅れた者から血吸いの刑を処している、なんと何者かが流れに逆らい外からやってきて、拡声器を使って僕に語りかけて来た。

「郵便です、お品物、将棋の盤と駒ですね、ここにサインを」

なんとということだ。拡声器を使われた僕は役所内での惨劇などまるで無かったかのように駿河台下の交差点にいる。酸性度書店では僕の本のフェアが開かれているらしい。僕はいつそんな本を書いたのだ。記憶に無いが、僕が

書いたことを僕でない複数の誰かが観測し証言することによって、科学的に現実のものと証明されたということになるのらしい。僕の認識している世界と、現実のこの世界は、異なる世界線で進行しているようだ。僕の知っている現実はこの世界には無いのだ。僕の認識とは隔絶したこの世界、この現世。生まれ変わって天狗になって風を操って、僕に帰依した老若男女のために虚妄の神がかりを演じ、舞い散る花びら一枚一枚へ素早く飛び移り、三千世界を統べるにまで至った所でご臨終、そんな妄想が繰り広げられる僕の脳内から、一輪の花が眼球の間隙である睫毛だまりを経由して飛び出した。花は僕の利き腕である右のうでで、つまり腕からうでのひら、すなわち手のひらに零れ落ち、無意識に掴んで握るとそのまま筆のように紙切れに署名捺印した。「まいど」と誰かの声がして、紙切れを持って去っていく。その後姿はまるで郵便配達員のようなのだ。僕は郵便を配達されたわけでも無いだろうに。そう、こんな街角に配達はなかなかしてもらえないだろうことうけあいなものだから。花は恋人みなに行き渡るように念力で増殖させ、皆の髪に刺さって飾られた。そうなるように思い願っただけでそうなってくれるのだから、超能力とは愉快なものだ。快適な軌道を描いて皆の髪に至った様子も、なんとなく洒脱で、可笑しみがあって、まるで透明人間が複数人、僕の手から花を取り、彼女たちの頭まで運んだかのような、そんな情緒があった。花は彼女たちを守るプロテクター。いざというときには服の代わり、そして傘の代わりにもなるのだ。晴れているときは日傘に、雨降っているときは雨傘に、曇で日光も雨も無い最高の天候のときは彼女たちの洒落た服になって存在し、いつでも、いついつまでも、いったいいつになったら将棋の盤駒は届くのだろうかと僕が心を痛めている間も、彼女たちを守って存在し続けてくれたのだ。良いことをしたな、僕は。これで誰から褒められたとしても、このことを褒められたのだからという見当がつくようになった。人々から褒められた時に自分の何が褒められるに値することなのか不安になることが無くなるか減るかするのだから、この出来事は良い出来事だったに違いない。僕が自分という存在に何らかの自信を持った今このタイミングで、僕の足元には将棋の盤駒があることに気づいた。なんとということだ、僕が気付かないうちに盤と駒は到着していた。これではまるで郵便配達員のような素振りと振る舞いをしていたあの誰かが、実際に郵便配達員だったのかもしれない可能性が高まってしまうのではないか。僕は僕にとっての郵便物と郵便配達員の信頼度、友好度、などを鑑みたけれど、郵便を配達した者が郵便配達員だったのかどうか確信することはできなかった。しかし、けれど、まあいいじゃないか、という気持ちがある僕の中には湧いていて、誰が誰で何者で役職と人格の非整合性をまとっていようと僕にとっての確信が得られなかつと、物さえ届けばいいんじゃないかという、そんな杜撰な人間として生きる運命を僕が僕自身に受け入れることが大好きになって、そう、もう僕はそれ以上の考察をしないでいいじゃないか、と、何の論拠もなく信じることに逃げたいと思ってしまうていたのだ。だから僕は将棋の盤の前に座り、駒を並べて、

将棋を指す準備をしだした。周りには何名もの人々がいる。誰だっけ？ 思  
い出せない者ばかりだ。けれど僕と親しかったであろう人達にこやかに僕  
を迎えてくれる優しい雰囲気を醸し出してきているので、僕は大いに安ら  
いだ。盤を挟んだ向かいには分厚い座布団が五枚積み上げられて敷かれ、そ  
の上に黒猫が一匹丸くなっている。いいことじゃないか。猫が安らげる場所  
が、今、僕の目の前に実現しているのだ。こんなに平和で豊かで心和やかな  
対局は生まれて初めてだ。

「3四歩」

猫は発した。声だ。小枝のような声だ。猫は指というよりは前足の先全体  
を使ってちょんちょんと駒を突いて動かす。戦いは始まり、僕は角道を開  
け、猫は開けていた角道を閉ざし、こちらが飛車先の歩を突くと、猫は振り  
飛車の陣形を目指しては目刺しを食べる。ならばこちらも対抗せねばなるま  
い、手近な誰かに近所の羊肉の店からのテイクアウトを頼むと、その辺にい  
た数人がみんな注文し持ってきてくれる。そして僕は食べるのだ。手目  
を指さなければならぬ状況で、僕は羊の肉を食べまくっていた。それまで  
じっと我慢しながら目指しや刺し身を食べていたハードボイルドな猫だった  
が、黒ずくめの体が証明するように、かの猫は魔法を使うことが出来るの  
だ。赤い首輪に輝くヒトデ様の星の宝石を売り渡し、ビーズ玉と共に買った  
はんぺんにパンをパックしたランチの物品へと包装を施して、原価の3.5倍程  
度で売り出すも捌ききれず、原価割れし収益はプラスにはならなかった。こ  
の事実による心労が新郎の猫に家庭不和をもたらし離婚、そのショックで動  
物病院に入院し、そのまま残り時間が切れた為に将棋は猫の敗北となった。  
その間、僕はずっと考えていた。次の手の、その次の手の、次の手を。それ  
なのに、そんな夢にまで見た状況はもう訪れることは無い。僕は五枚の座布  
団の上に鎮座ましまして生ける魂魄となった黒猫を臍気に視認してい  
る。

「猫はもうそこに居ませんよ？」

そう告げてきたのは僕の事務局の神武天皇ことジムムその人だった。彼は  
国籍のわからない孤児出身で、施設の責任者の勘と閃きによって、ジムムと  
いう名前が付けられたのだ。彼のことを皆が天皇と呼ぶけれど、天皇だった  
ことはない。けれど彼の経営する何らかの怪しい店にどういう理由かわから  
ずに皇族の使者が来たことがあって、それ以来どうしても彼を天皇と呼んで  
くる者がいるのだった。うちのジムムはジムムでありシエンムーにこそ近く  
あれども、神武天皇では無いのに。

「ヨガヨガ、もとい、世が世なら天皇であったかもしれない君に、僕の目に  
は見えている、かの黒猫の姿を伝えたい。かの猫は」

「あーっ、待ってっ、今はだめ、今は無理、ごめんなさい、あなたとそうい  
う関係になることは今はできないんです、信仰上の理由です、新工場の生産  
ラインにも関係して、あっ、そこはだめ、あっ」

僕が喋りながら彼の特に鋭敏な身体部位を手で触り平静な感情を保てなく

なるようにしたところ、彼は頬を真っ赤にして悦びに溢れ、耐え難い快さによって頭グーチョキパーになってしまったのだ。頭グーチョキパーになつてしまった彼はそれでも話を続ける。

「猫っ、猫、猫なの、あっ、ジンムくん猫っ、あっ！ 嬉しいっ♡♡♡ 嬉しいよ、てりり君、あっ、ああっ」

「僕の名前は言わない約束だよ。しかもそれは隠されに隠された本来の僕の名前じゃないか。きちんと今の仮の名前、紫芋染之丞と呼んでくれたまえ。そして、そう、かの猫は生霊として今もそこに鎮座ましましていて僕を見る。喜んで、嬉しがって、白いお腹を見せている。尻尾を振って、僕には、はんぺんパックをくれようとしているんだ。そうすることで僕を懐柔する策略だろう」

もう勝負がついたことを知らぬまま、無邪気な猫は現実を受け入れられず意識が解離し、かように魂魄の尻尾をふりふり寝転んで猫コロリンなのだ。

「猫はっ♡♡ 素敵だね♡♡♡ 猫は猫で、僕も猫なんだ♡ だけど信仰上の新工場がお新香を作つて売つて、糶を、浩次が、向上するんだ！ ああっ！♡！♡！♡！」

祝。彼は更に重ねて僕に吸い付かれた胸からの刺激によってついに快さを極めたようだった。脱力して床に崩れ行くジンム。彼が腰をついた辺りを中心に、なんらかの薄黄色い液体が床に広がっていく。

「秘書、メイド、爺や、この液体を瓶に詰めてこの地域の稀少な特産物として全世界に販売しなさい。そして下半身を包む服の中に秘匿されし白濁した液体を凍らせて長期保存するのだ」

「ははっ仰せのままに」

「ははっ仰せのままに♡」

「ははっ仰せのゲホゲホのままにホッゲホッ」

僕の忠実な部下の一部である三人は醤油もとい石油をチュルチュルする装置で液体を吸い取つて一升瓶に送り込み、詰めた。そして僕がこの世界に齎した聖なる液体として人々に一滴十萬円で売りつけてはカクテルに混ぜて飲ませるのであった。こうして僕は猫の負債を返済し、それどころか財を成し、動物病院から猫を引き取ることが出来た。僕は猫を可愛がり、猫はただただ遊びたいばかりの猫として、いつまでも僕と暮らしていくのだった。猫のことを心から愛する気持ちになった僕の優しくて可愛い音を発する音叉は猫であるけれど、僕は自分の教団による利益を問題視され、司法によって鞭打ちの刑に処されることとなった。恐ろしい気持ちの中にほんの僅か楽しみな自分を感じつつ、神の不在を嘆いた。僕にとつての神は霊なので、猫の霊も神なのだ。神猫の降臨は必要で、だから僕は散歩して、うちの猫を探した。うちの近所にうちの猫はいないのか。僕の心の猫は神か。

「神よ、霊よ、猫よ、ひねもすのたりよ！ 近隣の猫をリストアップしてそれぞれに相応しい飼い主を見つけよ！ さすればお前に猫ゴロニャンと喉を

鳴らすチューチューする食べ物を与えようぞ！」

そう騒ぐうち、猫は確実に近寄ってきた。姿は見えないが、それが神と云うものである。僕は秘書の一人でもある猫のことを思い出し、スツと取り出し、本日の御祭神として神棚に飾った。ピカピカとゴロピカに輝く稲妻が神殿である神棚に落ちて、「みみゃう！」叫ぶ猫は光り輝く。雷が猫へと奉納されると、猫はギンギラギンに輝いて、託宣を告げた。

「衆生よ『怪奇 神憑り呪殺』を百冊読み上げよ、そして『罪人と猫の地獄 刑罰』を百冊読み上げよ、さすればソナタの望むコンツェルトがコンツェルトによって協賛され、コンサートが開けるであろう。さらに『牛猫ギューニャン』を百冊読んだならば、富田林の土地が少し手に入るキャンペーンが促進されている。さあ読め、買って読むのだぞ、金は払われなければならぬ、買わなかったならばボクサーの人が連なってお前を殴り、空手家の人が連なってお前を蹴り、レスラーの人が連なってお前をリング外へと投げ飛ばす。さすればお前の全身の骨は砕かれ、口は開きっぱなしで涎は留まるところを知らない。両手両足はそれぞれバラバラになり、首根っこひつつかまえて胴から脊髄を抜いてしまふやもしれぬ。それを避ける為に、皆で買おうぞ今日中に」

ピカピカの猫は一冊千円らしきそれらの本を売り始めた。僕は僕の著作が売られることに恥ずかしさがありながらにして「今度買おうよ」と云う無責任な言葉ではない「買ったよ」と云う確実に販売されてゆく本たちの行方を眺められる恍惚を味わっては、喜びにときめくのがあった。僕の心の中の猫であり霊である神は恍惚としながらアヒルと対峙した。アヒルの神は猫の神と並ぶと、凜とした佇まいで「ぐわ！」と叫び、猫の神は退散した。このアヒルは神の格が高いのかもしれない。僕の中に佇んでいる猫の神の霊は、僕たち私たち、紫芋と御一行様の一員となったにも関わらず、我が軍門に下ったありんすでありんすの子であるにも関わらず、我らに同調せず、眠り奉るのであったとしても、奉られ威張りに精を出すことこの上ないのだった。僕は気づいてしまった。このアヒル神を狙って何らかの動物が向かっているのだということ。それを私は自分の高貴なる能力に拠って知った。高貴なる好機でコーヒーを粉挽きにかけるのだった。僕は高貴さを感じながら眠り始めた。

やがて、それはやってきた。すやすやと潜み安らう蝙蝠に、テクテクと進み歯向かう子守を、落ち落ちとぬるみハム買う用よりも、私の願いふりかけましようぞ。アヒル神の命に向かって飛び続けた蝙蝠を、高貴なる僕の腕で叩き落とした。神は救われたのだな、と確信し、僕は再び眠りについた。何度でも、何度でも、僕の神を傷つけるものは赦さない。平和たるアヒル、猫、その他の僕の信仰の源を、傷つけるものは赦さない。赦さないにして、その存在のことを決して口外しないであろう。僕は死ぬまで決して口外せず、赦されなかったもの、誰の記憶からも失わせ、この世界に居たことを無かったことへと変ずることにしたのだった。誰も蝙蝠のことなんか知

らないし、知らないのだから思い出すこともできないで、そうして、居ない存在に、蝙蝠は成った。このことを知っている僕がそのことを忘れたとき、やっと咎人は世界のどこにも居なくなつて、成仏するのだ。その時に、僕の猫神は「みにやうにゃ」と呟いた。この猫はあの猫とは違うし、あの猫の靈はうちの猫に憑依した。うちの猫を可愛がる度にあの猫は癒やされ浄化され、どんどん安らいでいくだろう。そうしてあの猫は、薄れて、消えて、無くなつていくのだ。きつと、いつか、うちの猫が自我を取り戻すその日まで。

「0.0 靈魂魔靈病 0.0」第一章 近しき猫たち 完

「0.0 靈魂魔靈病 0.0」第二章 かわよいかよわい少年

あれから何年経つたらう。いみじくも靈魂魔キラーとして僕の名は世界に轟いていた。そもそもまず靈魂が僕のところ寄ってくるのであり、僕はただ自分の身を守っているだけなのだが、しかし、けれど、どうしても、数限りなく靈魂は、玲子と麗子と礼子と令子と怜子と冷子に成り代わつて、僕の身に付けた幾つかの対処法の実践と経験に寄与するばかりなのだ。

そんな僕のところ、蠟で封緘された手紙が届いた。世界の果てに住む少年から、僕を頼つて靈魂の魔の靈病を打ち破つて欲しいとの頼みの手紙だ。僕の中にある神秘の力はかよわい少年を守つてあげたい、守つてあげなくちゃ、僕が守る、という三段論法で胸ときめいた。僕は彼の神になる。

僕は猫の件の最中に無意識の内に関わっていた世界有数の富豪からプライベートジェットを借りて、世界の果てまで飛んでいった。それは世界地図にも地球儀にも載っていないどこにも書かれていない断崖絶壁に囲まれた不思議な島で、その滝の裏から続く地下の世界へと僕は向かった。地下にはモグラ人間がいる。はて僕はモグラ人間に会ったことがあるような気が。いつのことだったか思い出せないが、たしかに見たことはあると確信し、けれどその確信は周囲の誰にも伝わらない。僕と一緒に来た無数のお付きの者たちは、僕が何をやっているのか理解することは無いのだ。何もわからないまま、ただ、僕に付き従っている。僕への尊敬と、敬愛と、僕からのお褒めの言葉を貰うためならどんな苦難も克服して実行してくれる、そういう者たちだ。だから僕のバーテンはこんな滝の裏でもカクテルをシャカシャカ混ぜては飲ませてくれる。コックは皆にサンドイッチを配ってくれる。なんという美味しさ。なんという幸福だろう。僕は口中に咀嚼したサンドイッチがあるままでカクテルを口に含み、ぐちゃぐちゃと噛み締めながら全てをゴクリと飲み込む。整った僕の美しい外見からは予想もつかないほどグロテスクな身の内を晒しながら満天の星空へと思いを馳せつつ土中を潜って行く。モグラ人間達の案内は簡単で質素で堅実で、僕がどんどん先に行こうとすると、ス

ツと僕の前に出て背中を見せて通せんぼ。時折チラリと見つめ合ってはニヤツと笑って、それが二人にとっての合図のようで、僕には彼らが何をやっているのか、また何を感じながらそんなことをしているのか、全く予想できず、困惑した。彼らはいつまでもどこまでも、ただただ簡単で質素で堅実だった。

奥へ奥へと案内される僕。どうにも埋まらない生理的な違和感は、土中の道の何もかも全てをドス黒く感じさせてくる。茶色の土が、赤黒いような気がしてくるのだ。目の前のモグラ人間たちは何かを楽しんでいる。それは判るのに、何を楽しんでいるのかは一向にわからない。ただただ後に付き従う他無い。目的の見えない行為行動はそれだけで人間を消耗させていく。灼熱の砂漠よりも、息をも凍らす極北よりも、ずっと僕は暗い意識に捉われる。視界が遮断され、脳に視覚情報は伝達されない。それでも僕はこの先に居るのである。少年を助けて、少なくとも彼が選挙権を得るくらいまでは頑張らなくちゃならないと思うし、芋を食べながら茶碗蒸しを食べたいと思いつつ足を動かす他は、僕に出来ることは無いのだ。

やがて、歩いている最中に倒れた僕は、タンパク質によって250人ほどに増えたお付きの者たちから、全ての面倒を見られることになった。僕の意識は気高く、か弱い。脆弱で美しい僕の意識と体は、神輿に担がれ、土中の道を往くと、頭はガンガンと天井の土や岩にぶつつけられ、足も硬い何かにぶつつけられ、手も肩も、何らかの物質にぶつつけられるのであった。ぶつつけられた体中が壊れて様々な身体部位がバラバラになると、その度にお付きの医療のエキスパートが繋ぎ合わせる外科手術を行ってくれる。僕の体はフランケンシュタインの怪物のようになっていて、そんな自己イメージが浮かぶものの、鏡を見るとなんともまあ上手く縫ってあって、僕は元通りの美しい外見だ。ここまで腕のいい医者が僕のお付きの一群にすることを誇らしく思う。僕のことを大事に思ってくれる人が現実にも身近にいる、それが僕にとっては何よりも嬉しい。

土中の道が延々と続いたその先に来たら、そこには豪華なシャンデリアのような形の、天井からぶら下がった宝石の城があった。モグラ人間が何か説明してくれているようだが、僕は城の美しさに気取られて何も聞かえていなかった。宝石の城にフラフラと迷い込む僕とお付きの者達。

「よし、ここを僕達の本拠地にしよう、千年王国の誕生だ！」

僕は提案し、皆の了解を得る。モグラ人間達は困惑しているが、僕という素晴らしい存在程には自分たちには価値が無いことを理解したのか、僕の本棚の裏側に隠れてしまった。僕の本棚で区切られる僕たちとモグラ人間。モグラ人間は、僕たちがいない側の存在になって、そこからまたどこかへ移動したようだ。確証は無いがそんな気がする。だから僕は反対側まで自分たちの領土とすることに決めて、お付きの者たちに本棚をドミノ倒しさせ、内と外の世界を繋げたのだ。するとあるうことかモグラ人間は内部の何処にも居なかった。内部は渦になっており、時空を溢れさせて異界に繋がっているよ



うで、きっとモグラ人間たちはここに飛び込み、異界に行ったのだろう。僕は異界に進出する冒険心を持っており、ついつい渦へと飛び込んでしまった。するとどうしたことだろう、渦に入ったと同時に別の出口から外に出ると、頭の中から目を通して火花が舞い散って、目の前にある火花の群れへと感染し、打ち上がり、火の粉の伝った森は火事になって、轟々と世界が燃えていくのだ。

「もし、もうし、子牛・孟子・投資、あらあら、通しませんことよ、世界を、爆発させなくてはならぬでありんす」

ありんすのおりんすが何か言っているようだが、僕にはペりんすだかぱりんすだかに聞こえる。深く考え込んでしまう僕は、これはプロレスのことでいいか、いいよね、なぜならそれこそが、プロレスだから、となった気持ちによって、僕の5時〜6時にかけての、お付きの一人による、ドスコイ、ドスコイ、と突っ込んでくる事柄に対応しなければならぬのだ。女性で、スレンドー、白鳥の湖の衣装を着ているお付きのものだ。お付きというからには付いていなくてはならない。されど僕は自由を標榜する天使のような存在で、何にも憑いていないし、疲れてもいないのだ。時と場所を隔てた彼の地へ渡る渦を閉ざすと、僕の中の猫三匹がミャーミャーニャーニャー言いながら口から飛び出してきた。激痛を乗り越えることができるか、否か。出産というものはきつとこういう痛みだろうな、と思った。そして何故か手に持っていたちくわを、僕のお付きの群れに投げ込むと、猫たちはこぞって群れに飛び込んで喜んで食べてくれるのだ。その食べっぷりを最も幸福そうな顔で見ている僕の横で医師たちは僕を治療する。彼らは脳のシジチュウが大好きなので、今日は僕自ら体を張って、IQが上がるシジチュウを受けるのだ。空回りする観覧車に誰彼構わず人を投げ入れたい。その願いを噛み締めながら、僕はシジチュウを受けるのだった。

一時間後、僕の中の塔に堆く埋もれた撒菱の蛙は、踏んだ人間へゲーコと鳴きながら息絶え足裏にこびりついた肉と体液で呪縛する。踏んだ人間に「嫌だなあ」と感じさせる触覚を暴発させ、緑色の体液を人体の奥底まで浸透させ緑色に染める。緑化が進み緑の自然が豊かになって清々しい気持ちの世界に広められていく。木々と化した人間は外の世界にどんどん進出している、人間世界を緑化するのだ。緑色の人間ばかりになった国の首脳部は、緑色の人間を焼き殺したり違う色のペンキを塗るかぶせて印象を回復しようと躍起になっているもの、緑色の人間は細胞の一つ一つまでからも緑色であることを主張する存在であるため、人間とはそもそも緑色であることが基本なのだと言言し始めた。僕は地底の奥深くで、恐ろしいな、恐ろしいな、怖いな、怖いな、と震えつつ、色に捕らわれない人間の価値を乗せた波動を世界へと鳴り響かせ、歌った。お付きの者たちの内には演奏者もいたし、僕らのハミング作曲へ即座にオーケストラ・シヨンの編曲を加えることが出来る者も数多く居た。だから僕は安心しきってお風呂に入りながら歌うハミングを彼らが壮大で荘厳で愛と喜びにあふれる曲へと仕上げる幸福を甘受し続け

るのだった。風呂上がりにはフルーツ牛乳を飲み、体重計に乗ったり降りたりし、体を拭いて髪にドライヤーによる風を当て、丁寧に服を着てから湧き上がった温泉に沈む。するとなんとということだろう、乾いていた服や乾いていた身体部位があらゆる箇所でびしょ濡れになったのだ。僕はなんだか楽しんで、そのままチャプチャプ、温泉を泳いだ。僕のふくらはぎから足先にまで、引き攣れた痛みが走ったのはその時だ。僕の体の全てが沈み、息も吸えず、窒息し、温泉の湯水がどんだん体の中に入ってくる。体の中に入ってきた湯水は、僕の気管を塞いでしまって、たまらず咽るとその分どんどん湯水が入ってくるのだ。僕は死を覚悟して、もがいて足掻いたけれど、苦しみは増すばかり。もうこれで一卷の終わりだな、と思ったところでお付きの者達が飛び込んできた。僕の体にはあらゆるもの先という先が入って湯水を抜いて酸素を補給していく。その行為に僕はミルフィューユのような親しみやすい気高さを感じる。パレット状に広がるミルフィューユの気高さ。舐め回すとチョコのように溶けて甘いそれを、僕は胸いっぱい抱きしめて、ビシヤビシヤに濡れた服をさらにベトベトにして祈るのだった。

僕の鼓動に蔓延ってくる蔦とぬたは僕の神経に取って代わり、体の中をやたらめったら走行しては傷つけ、灰になり、その粒子が血流に乗って体の各所に関を作ろうとするのを、医師の力と自らの治癒能力によって相殺し、なんとかして、なんとなく、生存を続行させるのだ。そのようにして生きていく僕は、地底生活にすっかり飽きて、地上を渴望するようになった。地底モグラはモグラ人間であり、地底に兎は見当たらなかった。このことはアリス信奉者の僕にとって意外すぎるイグアナで、じっとして身動きしないイグアナは餌を待っているのかなんなのか、バスでも待っているんじゃないだろうかと半信半疑で訝しげながら、僕は彼を日がな一日観察していた。朝に陽が差し込むような、そんな生半可な地底ではないこの地底は、空っぽになった干し葡萄に水分を足す作業を怠らず、レーズンなのか、はたまた蜜柑なのかも区別が出来ない歩道橋が知恵を寄せ合って、大枚をはたいてタイ米を炊き上げ、食べ、栄養に満たされた僕によって食された。それらは、年末年始の清らかで引き締まった思いの中、神社へお参りしたいのだ。だから僕は生きなきゃならない。地上へ戻らなければならない。地底世界には今のところ神社は無いのだから。そう思った瞬間、僕は宇宙に居た。宇宙服を着て酸素もしっかり供給されている。僕のお腹の悪魔は眠たい気持ちを抱えながらも非常に悪事を働いてくれている。その僕の為の献身が、僕の心を温かくするし、その行為の先にある真の目的へと思いを馳せたとき、きっと僕は何らかの策謀に乗せられているのだろうと悲しみ、苦しみ、温かみ、ぬかるみ、はっぱふみふみ、はっぱすいすい、そう思ってしまうのだった。僕の心の奥底にある大事な何か欠け崩れていくのが手にとるようにわかる。その分の抗体を身に着けながら、喧々諤々とケンケンとガクガクがパンダに名付ければ、深読みする知能を遮断しようと思いかけてくる。無理だ、無リーダー。そんな風に思ってしまうのも無理はないところで、強力な日溜まりに身を晒

して温かみを摂取する。無垢な懐の深さを浚うように塩を搔き出して、黒く甘い飲み物を飲むのだ。境界線を引きちぎって村の区画を破壊し、我々の領土として宣言する。すると地上へと伸びた虹の架け橋が一気に僕らを地表へと流し込み、寒天のようにプルプル震える僕らは、今が冬なのだと言粉と煮成るのだ。どうやって作ったのか分からないその汁粉の美味しさにとるける気分で落書きを始めると、悩みがふくらんでシチューになってしまふ。シチューはどう膨らんでパン生地に入り込むのか、モロキューとカップ巻きをさらに巻き込んだシチューにチューしてネズミにチューと鳴かれて治癒してまわる善良な医師が三匹過ぎす。割り箸を空手で真っ二つに割って、ちよとよく二つになった割り箸をつかって屋台のラーメンをチャーシューのみにして周る。八分に発奮して魎魎に朦朧とし、向かい側の袖を擦るようにして策略を謀略に進化させ、コロッケを食べることを拒絶し鰯の刺し身を醤油につけてパクリと啜える。斜め半分が口から出て残りが口中で舌で舐められ噛まれ始める。上顎と下顎の協調したリズム、はみ出した半分を口中へ引きずり込むタイミングと一致して良い具合に味が滲み出る。十分に味わった後しかるべきタイミングで飲み込むアイスミルク及び小豆を整え、ミルクケーキと練乳いちごと甘さたっぷりの症状が自己愛に結びつき計量カップいっぱい愛がザラザラと音を立てて転がり去っていく。スタイリッシュな輪ゴムで僕の口を縛る。無闇矢鱈と練乳が結びついた時、大地は光り出し、関係有る人にとっては愛と絆の確かめられる日であるし、水田橋駅と飯道橋駅をつなぐ線路に豚肉を撒く犯罪を犯す透明な咎人がミンチになるまで電車が走り続けて行く。その後ろに捕まってトロッコ片手で漕ぐ部下が僕のところまで追いついてきて、怪しい獣が唸り声をあげて三つ子の魂百までという気分で人々の後ろ姿に落雁を乗せ続ける。紫色をした新品の靴下を口に突っ込んで、自分の息の根を止めようとしながら走り出した僕を部下たちが防ぐ。ああ、僕はフレッシュミントの味のする新品の靴下を飲み干すことはできないんだな、と落語を聴きながら足が前に出る。ミルク色が濁ってキャラメル色となり、收拾がつかない蒟蒻色の甘いゼリーを喉に詰まらせないように努力しながら羊毛フェルトの手触りとキルトのようなタルトのようなコルトをぶっ放して推理小説を読んでいる。馬に乗っていたはずなのに、どういう訳か羊に乗っているし、ワニに飛び乗ったりして、因幡のライトワニ缶を噛みちぎったり捨ててしまったりしたのだった。

僕の目の中に入ってくる銀河はどこまでも素速くて、医師は僕に「安静時睡眠症候群です」と告げるのだった。しかしそれは誰にでも日々訪れる不思議な不思議な意識不明の状態のことであり、その症候群にかかっているものには生き続けられないものだと思われる。僕は敬虔で敵かな気持ちになつて眠れる夢の旅人たちの幸運を願った。

黄金色の鳥が羽ばたく空。僕の夢、僕の胸、僕のコネを利用して世界から金銭を受け取る夢を見た。その夢を見たのが本当に僕自身なのか自信が無い

けれど、僕の夢の中で僕は生きていても構わないと承認して貰える人間であり続けた。そんな人間が本当にはいないのだとしても、僕の胸の奥の核の魂は、心臓に宿っているのか、はたまた頭脳に宿っているのか、僕という人間の自分自身の意識というものが身体の部位としての何処にあるものなのかわからないけれど、僕は生きて今この時に感謝しなければならぬだろう。ありがたかたじけない気持ちで他所に、僕の耳の中にはナメクジが次々と入っていく。ああ、脳を食べに来たんだな。もう茄子がママ。僕は食い尽くされてしまうのだろう。

「バーン！」

誰かが叫ぶと、僕の耳の奥にまで、火炎放射器の火炎が入り込んできた。熱さ、痛さ、苦しさ、辛さ、全てが集まって、もう僕はすぐに死んでしまうんだなと覚悟が決まった。火炎は鼓膜の奥にまで入りこんで、ナメクジを焼き尽くした。と同時に僕の頭部も焼かれ、二度と元に戻らないであろうことに気付く。僕は不可思議なマリオネット人形で、僕の体を取り囲む火炎放射器の銃士隊がいつでも僕を消し炭に出来る状況の中、ぐったりと崩折れた。半開きになった目蓋の間から、足先の靴が見える。靴は偉大だ。僕がどれだけ疲れていても、靴は僕から履かれ続けていてくれるのだ。それによってつま先だけでなく踵に至るまでの丘陵を保護し、保全し、保険金の支払いは食い止められてしまう。けれど食いちぎられるままであったであろう僕の身体はいつの間にか守られ、僕は喜びに咽び泣く。と同時に僕は地上の病院に運び込まれた。

地底の王国は短い夢だった。そう思った僕の病室は、ICUだかCIAだかTPOだかKACだかなんだかよくわからないところで、僕は様々な管に繋がれて真白い羽根布団の下敷きとなり、天国と地獄を行ったり来たりしている間に、見事にアイロンがけされた皺一つない赤子のようなサルエルパンツコーデを、着させられているのだ。それによって胃の歌だったか、伊能忠敬だったかが胃液によって消化されていくのだ。おかしいな、僕はいつまで経っても腹減りばかりで何も消化した覚えなどないのに。この世は僕を消化させた人間を英雄として規定し僕を貶めてくる。世め、憐むぞ。と思った瞬間、何者かの声が浴びせられる。

「肉類を消化したことがあるだろう……肉類を消化したことが！」

と山のように堆く積もった芸能レポーター達が差し迫って押し寄せてくる。その重みで彼らという山は凹んで平地になった。いつの間にか並んで立っていた目の前の芸能レポーター宇宙人が僕に覚悟を決めさせようとする。世界の偉大な王の能力「空間の隙間に身を挿入する」を使って命ギリギリのやり取りをする。相手はいつの間にか残り二人だ。その一人一人が僕より上の力を持っていることはすぐにわかった。けれど僕は簡単に勝てるだろう。舐めてかかっているのじゃない。相手の動作の隙間を縫うように、素速く、かつ、ゆるやかに相手を交わしながら少ない機会で致命傷を与えなければならぬ。僕は斜めにスツと身を交わし空間の隙間に挿入されながら、もはや

レポーターではなく宇宙人とも言えぬ宇宙鬼の心臓部を目指して刃物を突き立てる。と、刃物で切れ目を入れた途端、宇宙鬼は爆発した。しめた、爆発性の鬼だ。僕はもう一人の宇宙鬼をも切りつける。すると相手はニヤリと笑って皮膚を伸ばし僕にべったりと絡み付く。遥かな地平の果てまで伸びた皮は、遙という名がふさわしい存在である宇宙鬼の皮だった。伸縮自在ではなく、ただ一方的に伸びるだけの遙を僕は僕の内へと取り込むと、遙の伸びる皮膚の力を我が物にした。僕はそういうことが出来るのだ。幾らでも伸びゆく皮膚をカットして、鬼の、鬼であったはずの鬼部分を、デザインし、カットする。カットされた分の皮膚は太陽光を受光して電力を蓄えるタイプの蓄電器になっており、しかも蓄電器にピタリの平穏な装飾で、とてもとても質感が良いのだけれど、皮肉なことに受光部を塞ぐことで太陽光を蓄えさせない作用及び効果があった。その状態になった蓄電器である宇宙鬼の皮膚は見るからに兎で、その兎の皮膚とも言える宇宙鬼の皮膚の兎は、躊躇うこと無く戸惑う僕に、橙色の喜びを与えてくれるのだった。

いつでも見た目に左右されるソクラテスの皮膚を思い出す、そんな事件が過ぎてもうかれこれ数分、僕は既にその記憶を失っていた。僕は僕が誰であったのかわからないまま落胆し、目も見えず、疲れ切って痛い痛い眼（まなこ）にナマコと豚の頭を乗せて燥いでは、冗談気質による音楽の拍子を三三七拍子に類する三三三三三拍子で印象を塞ぐと、むくつけき大男を一ミリ一ミリ丹念にピーラーで削ぎ分け、広告に利用した。宣伝というものに意味効果があるのは実態と印象の乖離が引き起こす錯覚を人は信じてしまいがちであるという怖ろしい過ちの錯視・錯覚・錯乱であり、僕は人がその程度のことを判別できない存在であることが悲しい。混同しなければ、人はそこにあるものの実体と本質を錯誤無く認知認識し、実態を在るが儘に把握して、本質から乖離した現象などという解離を認識の礎にしたりはしないものなのだ。一次資料を信じる者より二次三次の資料を事実として信じる人間の愚かさには僕は人間を諦めそうになる。価値の乏しい錯誤した現象を信じて現実の実際の事実を棄却してしまいがちなのがオカルトというものであり、事実に対応しない存在達にとっては、事実というもののほうが、ありもしない絵空事なのだ。そんな彼らを退治してくれたら、桃も、すももも、もちもちの木。もうそんなことに自分の視界を錯誤せしめて物理から逃れ精神の誤謬に自らを内包させることに生きがいを見出す人々に別れを告げようと、されど自分の周囲に現実存在している錯誤信奉者たちへと物理を伝道したく、そこには宗教戦争が起こる発端が確実に含まれているのだからうけれども、そうしないではいられない自分の心根の真実があるのだ。だから僕は殺されるし、僕を殺す者は世界を一段と低く変化させることが出来る。それによってインド風のカリーは欧風のカレーへととって変わられる悲しみを発生させるし、人気者のステロタイプというものが、カレーを飲食する機会と比例することだなんて、僕はちっと思わない。ただ、飲み物であるとか、辛くなければならないとか、そういうのはカレーの定義でなくても良いと、僕は思っている。

た。

三日間の三月兎体験は震える箸を掴み、身悶えするような神霊どもを食べ殺す。武者武者。僕は鎧兜に箸という格好で動き出す。ガチャリ、ガチャリ。利き手は右手、その右手を伸ばすこともできないほどに締め上げられた鎧武者。自分はいつの間にもそんな姿へと変わり果ててしまったのか。僕の心根の確かな部分で、人心地がつけるまで安らぐことを念じた。ゆったりとした僕の武者姿は、コスプレ及びゆったりとしたキャラクターとの相似形を感じる。たとえそうでなかったとしても。

行方を追い出したのはその頃だろうか。僕は彼とその彼女との逃避行を追い始め、無限の重力によって落下する人間と鳥と飛行機を深く悼んだ。難しい掛け算はプラスやマイナスされて、村の者たちから幸福を巻き上げる。無重力が無重量かを定めかねている都会の人々によって村の幸福は定義され、阿漕な商売に精を出す都会人たちによって静寂を感じるまでに鎮圧された。幸福とは一体何だったのだろうか。持ち掛けられた餅が掛けられた掛け軸となり、昼日中から人の喉を詰まらせる活動に躍起になっている。もはや人類の行く末は餅と街とムチとケチによって道を開かれるのだ。僕はもういい。そんなじよそこいらの金字塔程度では、もはや僕の感情を動かすに能わず、赤飯に塩をかける暇を惜しんで味わいを減らしてしまう、そんな過ちに落ち窪んでいるのだ。銘々の思う所、繰り返す真珠を飲み込んでしまう病気によって、落雁と落花生を味わう楽しみ程度の水準に、人は進化を遂げていた。そのあたりのものでも楽しんでしまうことは、人間の懐の深みだ。人間の、人間による、人間の為の、人間。アンドロイドかロボットか、餡ドーナツか路傍人（ろぼうど）か。昔馴染みの酒場の人達は、皆みんな皆々見んなと拒絶などせず穏やかに暖かく暖炉のあるお店に僕らを迎え入れてくれるのだ。そこに充滿した懐かしさは皮膚や口や耳や鼻や目や毛穴などから止めどなく流れ込んできて洒落たパーカーを千切ってこそばゆく感じられるようにしてくれた後に着せてくれるんだ。ココアとミルクしか注文しない僕のために絶えずミルクをキープし続けてくれる店主の優しさにはほだされて僕は人に優しくすることを誓う。だってそうでもしないと人間として人間たちから迎え入れて貰えないのだもの。そうする他に道は無く、僕の感傷に傷ついて去っていった幾千もの人々が拐かされて食べられて来た歴史を紐解くと、そこには人間性など介在する余地も無く銃の煙の匂いを嗅ぐ風変わりな女児を踏襲した風変わりな女児服の大人の女性が人々から嫌われ嫉まれて悲しみを発生させながら藻掻き苦しんで生きていくことになってしまっただけで、胸いっぱい溜めた空気でため息をつくところには、無数の羊と山羊とおじいさんとハイカラな児童とペーターとパーヤネンと蔵に入ったラファが現れ、犀の食べた野菜の霊に取り憑かれた皆が全員から視線を外して絶え間なく煌めいて結晶化していく模様を人々に見せつけながら失われていく状況が描かれるのだ。

ミネストローネ、とは何だったのだろうか。僕の沢庵から作り出せる食物だ

ったであろうか。黄色いそれは、元は白色の大根だったのだろうけれども、幾千万のおかずから採択された人類への贈り物としての価値は、如何許りだろうか。僕自身の消化器が僕に許諾する味や量は、僕の限界を教えてください。蜜柑のほうが好きだったな、と思い出した僕は、暖炉に焚べた薪の焼かれる匂いに魅了される。ああ僕は、今すぐ何らかの肉をこの暖炉で焼かねばならないし、それを美味しく食べなければならぬ。ねばならぬ、とは言うものの、金色の光り輝く財宝を採掘しに行かねばならない気持ちに拮抗し、夢を見るために眠らなければいけない、とも思った。問題無い。間違いない。間取りも良い。真綿も良い。締め殺されたところで僕の生命の有無は現世の価値と比例しないし、宇宙の扉は最初から開かれている。そこに飛び込めばどこへだって好きなだけ行けるし、煮干しをしゃぶることだって、煮汁を庭に撒くことだって、骨付きカルビを頬張ることだって出来る。だから僕はアイスを手にとってその冷ややかさに心底怖気づいてしまっし、それを食べることで勝利の証を立てたかのように思ってしまったこともある。そうだが、僕は、生まれ変わった子牛なんだ。エチゼンクラゲより周到な計画立てられた子牛一匹の、群れの中で孤立した、はぐれ子牛なんだ。はぐれたからには誰よりも楽しんでミルクーナスイートネスを喉に流し込みたい。世間の荒波に揉まれことなんてしてやるものか。夢の中のガリバー旅行記のように、様々な国々で様々な出来事をまざまざと見せつけられれば僕は、一息で吸い込み食されてしまう国力というものを感じさせられてしまうだろう。そう思いながら僕は肉の塊を頬張るのだった。無闇矢鱈と腕を奮い、焼いた肉だった。その肉は僕によって食されてしまったわけで、さらなる調理へと誘われるばかりであったであろう本来のその肉の運命を、僕は変えてしまったのだと思う。そういうことが僕には運命付けられてもいるし、虫が這いずる地面に肉は置かれなければならなかったのだろうとも思う。僕はそんな虫たちの命になるはずだった物を食してしまったのだ。無数の命より、自らの肉体を生かすことを選択し、蠢いてしまったのだ。そして僕は難しい空間に辿り着いた。迷妄する狂言が口上に至り、行く手を阻む魚流を乗り越えて川の麓へ、故郷へ、飛び越えさせられている。したたる汁が地に落ち染みを作り、染みは繋がってそこには小さな海が出来た。僕は液体の手を逃れることができず、震える肩と、痺れる脳髓と、明らかに貧血な自分の体への不安に陥って、無限地獄へとやってきた実感を身の内に持ち、口から泡を吹きながら背中に生えている天使の羽を羽撃かせた。空は自由だ。海も自由。陸地にだけは地面があって、液体の中に暮らす生き物が生息できないでいるのだ。陸揚げされた海の生き物は地獄に墜ちたも同然なのだ。僕は地獄で暮らしたくは無い。海の水の中に命の火を灯す生き物たちは空を飛ぶ生き物よりずっと自然な生き物だろう。僕は鯨になりたい。鯨になって海を制覇する。今ここにいる海はしかし、鯨より七つの海より汎ゆる世界より広いのだ。その広さは宇宙より広く、水の中を滑るように走ることさえ出来れば、僕たちは光より速く海の中の地点にだって移動できる。海の世界は広く、光より速い速

度で移動できることを考えれば狭くも言えるのだ。宇宙は狭く、苦しく、苦味もあって、緑色の忍者が藻に擬態するのに丁度良かった。ワカメに隠れることも出来るし、いざとなったら忍術で海の外に出ることも出来る。そんなことが起きれば忍者界隈の皆が地上へと登ってしまっし、そうすると海に取り残されたはぐれ忍者たちが一人一殺のお役目を果たすことなく息絶えてしまう。難しい世界だ。そう思った時、僕の目の前に立っていたお殿様がバカ殿様と化して暗殺すべき存在へと変貌した。一人一殺。宿願を叶えることが今出来る。忍者である僕は殿にしがみつき、自分の体もるとも刀で貫いた。

「やった、ついに僕は人生の命題を解き明かし自らの意義を遂行することに成功した」

僕はそのように殿へと伝えるとともに息が絶え、殿の形をした風船が割れただけという事実を確認することができなくなっただけのまま、あの世へと旅立ったのだ。バカ殿は素早い。自分の身代わりの風船をその一瞬で用意することが出来るなんて不条理だ。しかしバカ殿は名称のみにてバカでは無いので風船を用意しきれてしまうのだ。恐るべしバカ殿、羨むべきバカ殿。僕には生まれ持ち得なかった才覚を、このバカ殿は確実に持っている。僕の嫉妬心は頂点を極め、昇天していく最中、突如、異常な興奮を伴って、人間たちのいるこの世界へと墜落し、魂を残すのだった。僕の魂から放射された僕のエネルギーは世界中へと振りまかれ、世界の細々とした隅々まで行き渡った。そして霊となった僕は思い出した。世界の果てに住む少年のことを。僕のエネルギーの伝わり方によって彼という尊い少年が、放射性廃棄物によって形作られた像だということを僕は知った。彼の放つ数万年の未来へと続く「影響」を、僕のエネルギーはすっかり取り去って、彼が罪業を被らなければならぬ事象を予め取り除くことが出来たのだ。彼は物を書くことのできない存在であったにも関わらず僕へと気持ち発信し、届け、現世たるこの世界を救ったのだ。少年の霊は役目を終えて鎮まってく。静かにキラキラと煌めきながら雲散霧消していく。彼のことを見つけた僕は、けれど、もうすぐ彼のことを忘れてしまうだろう。少年は世界から消え、僕の中からも消えていく。霊となった僕は夜空を見上げながら彼のことを思う。彼のことを思いながら見上げた夜の星はどこまでも綺麗だった。「忘れないよ」と呟いて、けれど僅かな時を経た後、僕は全てを忘れ去っていた。僕は忘れてしまった誰かのことを思っていたときのままの姿勢で、星空をいつまでもいつまでも眺めて、世界へと溶けていった。

「0.0 靈魂魔靈病 0.0」第二章 かわよいかよわい少年 完

「0.0 靈魂魔靈病 0.0」第三章 成仏の乱舞



僕は死んだようだが意識は有って、毎日毎日死んでいく仲間をあの世に見送っている。あの世とは、生きている人間に残されたこの世界のことでもある。同じ世界なのに見ることも触れることもできない虚ろな空間の重なりは、決して行くことのできない幻の空間を同じ場に存在せしめるのだった。

僕は靈魂となつて魔の靈の病を得た。これぞ靈魂魔靈病なりけり。さて、この病を活用するこの僕は閃いた。平目板を可愛らしげにひらひら姪の太郎に持たせ、彼女の男らしい名前が似合うボーイッシュに振る舞う姿は彼女独特の男のような可愛らしさ（それこそがボーイッシュである）を持っていることに好感を持つ僕が、彼女の平常心を惨殺するかの如く靈魂魔靈病の移動によって翻弄することも、彼女は遊園地のお化け屋敷を楽しむかのごとく満喫していた。満員の喫茶店のようなその楽しみ方は、ネットカフェ或いは漫画喫茶のようでもあり、ゲーミングチェアが奔放に並べられた放牧場のような場としても楽しめるものであった。椅子から椅子へ靈魂魔靈病で移動する僕はついにルーベンスの絵の前で犬とともに命を散らし、魂としては何度目かの昇天を果たすことができた。勿体ない命。四柱推命シチュー。水中名刺。それらを体いっぱい蓄えて、始終成仏しながら現世へと魂は舞い戻った。

これまでどんな動作をどれだけ素早く行つても終わらなかつた靈の動作は靈魂魔霊病すらかからず靈魂魔靈病で実現された。靈魂魔靈靈靈靈靈靈靈（以下無限につき省略）病、と、どれだけの靈であろうと、無の無いところに有り続ける。崖の上から真つ逆さまに落ちる速度より、僕は早かつた。これはただの靈に行えることではない。なにせ質量の移動速度を速度の概念から外し、完全に瞬間に移動が行われたのだ。パツと消えた次の瞬間には別の場所に居られる僕は、物理の法則からも逸脱する存在なのだ。現在この世界に滞在している僕の魂は数十ほどであり、億に達するまではまだしばらくかかるのだらう。けれど大判焼きを食べ終わるまでにはまだまだ数人分の僕の魂が必要であつて、名古屋に行つたり京都にいつたり、福岡という仮初めの名を使った博多に寄つたりして、九州から桃次郎電鉄のように空路で北海道まで渡つたりしている。そんな北海道を、僕は北方領土や樺太や千島列島などの自国の領土を思う気持ちで眺めていた。そんな僕は僕でなく、けれど僕なんだ。僕ではない僕のことについては僕は裁量を持つて決めることができる。それが僕だったとしても彼は僕ではないのだから。しかし僕は僕であるところの僕については責任が持てる。そこには裁量だつてあるのさ。なにせ僕は僕なのだから。僕の名を冠した僕自身は、今、何度目かの神保町に居る。言祝ぐ言葉を投げかけられて、僕の取り巻きが大勢で迎えてくれているのを感じる。僕は喜びの感情に包まれて、ふわふわとした綿毛の感触に身を委ねる。それによって眠気がまとわりついて、満天の星空のもと、遠い地の果てで降つた土砂降りの雨水による洪水が起こり、辿り着いたその洪水に流されて海を目指していくのだった。空中に不意に僕の魂が浮き上がった。分離、そして増殖だ。丸を描いて螺旋の渦巻、中へ内へ中心へ、曲がる道が

奥へ奥へと続き行き、はたまた入り口へ向かって波蹴って動いていく。すると一つ一つの丸の角から僕がひよっこり表れて、何千、何万もの僕になる。僕は踊りながら円を描いて、無限に増殖していく。これが靈魂魔靈病だ。僕は背負った鞆に入れておいた長大なカステラを無造作に手で掴み、千切り、それを口へと運んでいく。これぞ靈魂魔靈病ぞ。群がった羊のような焼き鳥。それぞ靈魂魔靈病である。湖の底に沈んだ王子の凍結された亡骸。靈魂魔靈病なのだ。焼肉。靈魂魔靈病。吐く息つ匹ワン（王）ちゃん。靈魂魔靈病間違いなし。薬物依存。靈魂魔靈病によるもの。世界平和。靈魂魔靈病。みんなみんな、僕たちが知らない間に自動的に本能に従って生きてしまっているのだ。だからそんな、みんながみんな胡乱な眠りに落ちて、靈魂魔靈病しているんだ。

僕が生まれ育った施設は主催者である孤独な老人とそれに悪態をつく女中との諍いが激しく、口論の音圧で建物が崩壊した。音は振動であり響き合った大地から彼方の村々へと蠢き各地方を殲滅していったが、耐震強度に忠実に誠実に建築された現代様式の建物などは女中の破壊力を抑え、道すがらガス硝子、魑魅魍魎の行き交う誠実な場ともなった。分岐された場には交易が発生し、人と人ならざるものとの交易によって死者の魂が生者の元へと売られたり、生きていたはずの誰かの魂があやかしの食料として買われたりして誠実な死の場としてゆうらりゆらりと主催者によって発奮されていた。この交易は後る暗い人間たちにとっての憩いの場でもあり、正しさという砂漠に出現したオアシスのような悪徳の果汁が浴びられる心安らげる場であった。

そこに現れたのは僕と椎茸人、栗人、雨傘、鳥の集いの長靴、習慣によって鞆された何らかの動物の皮に何らかの柔らかい装飾をふんだんに散りばめた見た目に反し軽いロングコート、チェス型の将棋の駒（逆さにして置くことが出来るデザインのため、成れる）、紅白の碁石、無数のセレンディティイ、くらげを奏で続ける演奏家、無限の力を持つ独裁者、干物、寒天、海苔。次々と散らばっては集合し離散しては結集する僕たち私たちは危機を肌で感じながらよじ登り始めた。天叢雲の剣にどこか似た気配のある一振りが僕の足先から這い登って来ては僕の手握りしめられようと僕の筋肉を操作して構えさせられると、驚いたことに無から有の鞘を生み出し、僕の腰にしっかりとくっついた。空いている方の腰には恭しく奉じられた黒い鴉柄の団扇が逆さに刺さっていて、僕の英気を養わせる。癒やし効果というやつで、それをもった団扇を装備した僕はRPGの勇者よろしく颯爽と歩き出した。つられてお供になった街の人々も、どこか胸が澆刺とした分かれ目に立ち、貧乏暇なし、悪態をつく竜宮城の乙姫、そして浦島neets太郎である。僕がその太郎であったならば、どんなに辛く苦しい思いをしたであろうかと涙ながらにオンオン酒飲んで叫んでしまうであろうこと請け合いなのであった。磨かれたボウガンと矢の価格を始終気にする奥方があるような気がして、僕は迷いながらも悪という名の正義を討っていった。ラーメンをおかずにしてご飯を食べることは、許されることなのかもしれない。そう気づいた僕は、正し

さを胸に剣先を喉笛に、乳飲料を左手によってゴクゴクし、絶え間ない切れ目ない流星群を目で追いかけてながら始末人としての責任を果たして廻った。これは世界でも例の少ない状態で、ミミズがモグラに食されることを暗に仄めかしている。座ったまま佇んでいる僕は、反っくり返ってペコ林檎（ペコが林檎を食べる意）した。両足を真横に180°開脚した僕はそこから両腕と足とその他の体のあらゆる部位を使って後方へと転じていく。丸くなったドーナツを食べつつ、後方回転の旅は続いた。もうかれこれ二十一年、自分にとっての骨を埋める安住の地と思っていた我が地域を逸脱しても、僕はこの回転をやめることが出来なかった。無駄足を運んで過ぎず再配達。僕の両足は開き続けた。痩せこけた畑の跡地に栄養を与えることだって出来たであろうが、僕はそうしなかった。だってこの世は、靈魂が魔で靈の病に陥っているのだから。だから僕は見かけた人物たちを正義とみなし、悪の立場から正義をやっつけて快哉を叫んだ。もうこれで僕は生きる必要が無い。もうこれで喜ばれることも無くせたのだ。一家が山奥にやってくる。だから僕はもういいのだ。役割を降りられるのだ。ありがたい。やるせない。ゆるぎない。温かい。ホットミルクを飲んで、靈魂魔靈病を弱めて過ぎす。これが僕に、君の、幽霊と、魂を、交合させてくれた「時の流れ」の実相なのだ。僕はくると踵を返すと、船に乗って海外へと旅立った。海外というのは海を以て隔てられた土地ということ、そこへと行くのは、海外旅行なのだ。だから僕が向かった島国が日本であっても、僕は外国と認識し、「早く日本に帰ろうよ」と佐渡ヶ島で頼んだのだった。海に隔てられた場所は自分の土地ではない。だから僕は、海外である佐渡ヶ島からすぐ日本へと帰途についたのだ。そのことを肯定してくれたのは、めくるめく金魚の群れをアートとして展示してくれている大きな裁量を持った十代の女子中校生社長、ジュリアだった。

ジュリアはシリアで手裏剣を投げては暗殺を繰り返す東欧の凄腕スイーパーだったが、ある時、一気に和の美に目覚め日本にやってきた。18だか19だったかの日本の血を持つ彼女は、実は人間の姿を借りた神であった。人間としてこの世界に顕現している彼女は、マクダーナルのハンブルガーとコケ・コッコーラを飲むと少し心が休む。だから休むためにマクダーナルでコロッケとコッココッコなのだ。ジュリアは「ハラショー！」と叫ぶと、ハンブルガーとコケコッコーラを刺し身の群れにぶちこまけた。その奔流に、醤油と山葵が流されていく。食卓からこぼれ落ちるコケコッコを複数のコップが待ち受けて迎え入れる。本当に本物の鰯の刺し身は甘くなってしまうけれど、僕達私達は元氣です。刺し身も山葵もコケもコッコも食べて体内へと迎え入れていく。流れる醤油と全ての山葵にさようなら。来世では幸せになりますように。ジュリア社長は僕より立場が上らしく、僕が専務を務める宇宙人を制作する会社の社長とはまた違った社長なる存在であるのだ。むやみな神と神々への連なりが繋がって、貴族階級へと迎え入れられることがあるよ。うな気がしなくもないまま我々は空へと浮かび上がった。重力の喪失だ。地

球は万物をひきつけていたのに、メロンだってスイカだって柑橘類だって空へと放り出される。今日が地球最期の日だなんて知らなかったな。そう思うや否や、社長の群れは重力を回復させた。それがビジネスの力なのだ。地球の中心部が全てを引っ張る世界を再現し、ルネッサンスと叫ばれた。ルネとサンスという名前が流行し、都市は村社会よりも生きづらい限界集落を多数形成した。人はそれを入道雲に似ているなと思い、せっかちなミルクキャンディで飾って墓と為した。僕の取り巻きの多くがその墓から無尽蔵に湧き出すミルクキャンディを舐め、それだけで食を満たすようになった。墓は後に泉と呼ばれるようになった。

宙空から放たれた網は海を覆って、その網に捉えられた今年のジュリアの漁獲高は壱かつ百%だった。獲得された分量のジュリアは過去の水準に比して僕の恋人たちの中で質量の密度が濃く、船内の水槽に充滿する海水の中で安心して眠っている。ジュリアが安心できる環境を備えた船内水槽なんてなかなか作れるものではないはずだが、僕はそれをやり遂げた人間のようだ。そのことについて実はよく覚えていないが、水槽をじっと眺めて中のジュリアを観察する。水槽の外側を眺めて手を振るジュリア。魚と人魚と人間の違いが曖昧になって、水槽の縁からは水が溢れ出す。水は人の心の奥底にまで深く浸透し、人の心のくさびを溶かした。その瞬間、大粒の涙が溢れてきて、人は泣いてしまう。泣いて、泣き疲れて、眠ってしまふ。ほんのり、ぼんやり、曖昧な意識がさらに蒙昧になっていく。世界と一体化した心は無と有の拮抗する狭間で夢を見せてくれる。ほうれ、ほう、ほうやれほう。混沌がペースト状に一体化して日々をクリームに塗り固める。もう終わっていく世界なんだ。やけを起こして沈んでいく僕。降り注ぐ虹色の雨。天井敷敷から現金を舞台に投げつけるパトロンの群れ。羊によく似たその群れは、金銭で武装した富裕兵のようにも思えた。劇場の裏手に回って水槽から伸びたホースを繋いでいく。ホースがグンと伸びるとその度に管の中から一人、消防士が消防服を着て生まれてくる。消防士は自分が生まれ出たホースを持って、さらに伸びるホースを支える。そうして繰り返しホースは伸び続け、消防士が生まれ続け、彼らの衣食住を賄うためのマンションが必要となり、中央に九龍城のような建物を造った。蟹味噌屋、謎の食材屋、ラーメン屋、和菓子屋、などの人気店が営業を続けるも、その外側は火で囲まれている。我々消防士はその火の侵食を止めて、業火を鎮火し続けてしまう運命に逆らえず、新たな鎮火した土地を入手し、その土地で商売をしているのだから、霊も鎮魂されていくだろう。恋人たちは商売を始め、迫りくる海と水路とホースと火と趣味のフープを見世物にして観光客を集めている。商売とはかくありたいものだ。それはN年後に武將の水攻めによって火が消し尽くされた時まで続いた。続いたものにはいつか終わりが来る。二人の兄妹がアヒルによって文芸をしゃぶられたので、我々は民族大移動を思い出し、それに参加し、配当倶楽部によって資金を調達しながら水筒で転ぶのだ。転んだ我々はぬか喜びをってしまった。転ぶことによって、得られたはずの配当が街燈の

火で無効化されてしまった。あんなに大金を得ていたのに、町が買えるほどのお金を。我々御一行様は温泉旅館にかけあってお酒を飲んで温泉に入り宿泊をして残ったお金を使い切った。それによって温泉旅館の経営になんらかの良さを与えた。報酬が増える業務に苛立って、その場に居ない誰かの金銭を分け与えてもらってきた。法律上、申告の必要の無い程度の遺産だ。胃酸で遺産を溶かす行為にもなれてしまった。緑色の葉っぱが緑色の昆虫を生み出しているわけはなく、皆でグリーン車をグリーンかつグリーンに塗りたくるとその場にいた虫がグリーンになってホールにカップを切られてはホールインワンを待ち望む、という事なのだ。出来る存在は違う。傭兵と監督とベーシストが混在するバーにバーテンの女子が「報われない魂は居なかったんだね」と言いながらやって来て、帰っていった。村祭りは雪まつり、雪を見たことのない南方に位置するこの場所で雪まつりをするのは憧れからだ。雪まつりが終わって刺し身を食べる。キリ・テ・カナワとニカウさんを混同する症状が表れたので底引き網を引き上げる。ルームクーラーをクーム・ルーラーという人物と誤認してはバウムクーヘンを食べたり、書店が自衛手段を用いて万引き少年を焼き殺したニュースを眺めたりした。世界は不幸だし、幸福でもある。港の向こうに島があるなんて、村の誰も知らなかったのに、生きていていいだなんておためごかしの慰めを与えようとする役人なども居て、世界はどんどん闇へと続いていく。森に入っていく感触があるのに体にはゴムが巻かれているだけだったりし、さりとて剥き身となった蛭を売る少年のことを思い出したりもするわけで、そんな日々が日常だったりするなんて、向う脛を使って自らを骨折させたりする日常にも回帰できるのだと信じて今日も一日生きていくのだ。

救急救命士の命を使って患者を助ける制度が出来てから幾つかの国家は生きる価値の乏しいように思えた人間を次から次へと救急救命士にした。救急に救命をする供物。それが救命師匠として揚げたて祀られた油を一度しか使わずに捨てるやり方によって救命する者なのだ。救命した命は潰える。だから今後は一切救命せず、捨てられた人間として粗末な衣を纏ってドンブラコドンブラコと流れ下って行くのだ。流れていく救命士は生き延びていくために救命することをやめた。人魚売りとして発展した人間の群れに合流し、人魚を自分の同族として活用するために食べ、繁殖し、改造を行って人魚柱と化したのだ。そうすれば人魚が人間にもなれるし人間になった後も救急救命で生きる可能性を残したまま過ごせる。時かかれていく間も意識はあるし、土に還ってからも長寿を誇ることが出来る。そうして人の世に居座った彼ら彼女らは、足を形成して人間になったりならなかったりした。夢中で空を飛んで、任意のタイミングでも、そうでないタイミングでも落下して砕けることが出来るようになったのだ。だから空を見よう。僕らの空には魚がいる。鮫も居るし、山椒魚だって居るしイルカだって居る。イルカはとつても頭がいいので、人間を次の知性へと進化させる力を持っている。人間より頭の良い存在。素敵な存在。見事な存在。だから人類はイルカを神とみなしては尊崇し

つつ、はたまた悪魔の化身として傷めつけた。宝の山に見えるのだ。イルカのイルカたる所以は歌手にあり、海を泳ぐものではない。しかしながら海の歌手たるイルカは歌も調教され、飼育係の指示通りに歌えるようになったものだが、「LOVE YOU」とは言わない岩魚なのだ。岩魚も言わなければ良い罨になることはできない。そんな不憫な存在を慈しむイルカは自らが虐待されていることに半分以上気付きもせず、マタタビ、うたた寝、招かれた。

「モウ」と乳牛が鳴いてはイルカがのたうち回る。そんな日々を送るうち、イルカは徐々に除毛の馬を見つけ出した。それがジヨナという上毛の馬で、敬称をつけて「ジヨナさん」、そう呼ばれた特上の女王陛下なのだ。我々は菓子折りを持って挨拶に行くと、女王は拗ねた幼さを発揮して、封雨月堂のゴ―グルという名前のお菓子を所望した。僕はイルカに封雨月堂のゴ―グルを買い与えてやった。卑しいイルカだ。個体名でなぞ呼んでやらないぞ。そう決意した僕の前に、イルカは居るか、オルカは折るか？ 遙は博覧？ 減るかとは分からん。そういうことだったのだ。難しい組み方の足のポーズを取り、足が複雑に折れて絡まっては牛乳の魂を欲し、朦朧とした右鎖骨を首輪として採用することになった。それは通常の手続きによって行われるはずだったものなのに、見た目の軽薄さによって打ち消される運命を抱いた軀の正体でもあった。軀は彼らの飛行船、風船ゴンドラ、彼方へと赴いて行くのだったのだ。難しい文句を呟きながら、民宿を欲して購入し、元々の所有者に運営を託した。それは驚くべき煌めきを放つ善行だった。

三日目に、三日月が三日目であると彼らは証明し、水の底からはとめどなく鬱屈した魂が浮かんできた。それは一見きれいなもので、汚濁した魂とは到底思えないものだった。けれどそれは汚染されており、僕等の、私達の、叡智の結晶であるところの魂の輝きに手を伸ばすれど、ギリギリで手の届かない位置にあつて、僕はダバダバときれいな涙を流し続けるのだった。

「死刑を問えないの？」

残念ながら問えないことを知っている大勢は黙りこくっていた。

「冤罪じゃないの？」

大勢はコクリコクリ坂で居眠りコックリであった。

「国の法を踏襲しないのであれば、個人の法を適用することも有り得る。人間の思いと重箱の隅には共通点があり、従順な女囚をスパイとして暗躍させた。見所を失った軽快さを向上させるに至ったのは毛玉を処断して滑らかな表層に頬擦りさせるためであつて、見たこともない金銀財宝が法廷侮辱罪に問われて無駄になるよりはずっと良い出来事がどこか遠くの地中に埋もれて、騒がしい喧騒からの避難を成功させ現在に至っている。だから死刑囚を死刑にしないで来たのだ。それによって死刑は執行されなくなり、治安は荒れた。だから」

「だから私が私刑による死刑を与えたのだ。人間にはそれが必要だ。無限軌道の彼方から林檎を求めて椎名の棚をディグる。するとヴァイナルがザックザクと発掘され、クラブでDJが卓を回すと人々は踊り出し、誰もが踊りの意

味を考えたりもせず無性に踊っては胸を掻きむしり、傷だらけの老人になつたところで素揚げにされる運命が待っていると云うわけだ。だからこの世に正義はない。私は私刑をし、死刑は実現される」

見かけから派手な振る舞いを見せる少女だけれども、分別を弁えない哀れな子羊同様に他者から虐げられて育った人間はそのようになるのだなと思つてしまふし人間として扱われる機会が通常の人間と比べて少なかった過去を持つものだから、正常な人間とのやりとりを行うことは難しいと思われる。そして人間にとって不可欠であるところの心の交流は現れず、羊だつて牛だつて馬だつて鶏だつて食べないで世界に現存している。きっと病氣になつて早く死んでしまふに違いない。だから心の支えとして、国家を転覆させ、新たな王族による短い歴史の王国が蔓延つてしまふのだ。ミントチョコ、食べる。それが茹で卵の目玉焼きであり、帽子でもあることになつてしまふのだ。僕は踵を返して駅へと入つて行き、改札で切符を切つてもらいたいと願ひ出たところで、手荷物の扱いとなつて籠の中の猫は震えだした。かわいそうに。僕の猫であつたから車での移動ができずに駅から電車に乗らなくてはならなかつたのだ。そう、僕の幸運の石碑が、引つ張ることで移動せしめることに他ならない。そんな自由な空間が我が国にはあつた。だからこうして今は違ふかつての時代と共に幽霊の世界で数限りないパラレルワールドのうち一つを実行している実感がメタ的には観られるのだけれど、僕の心はもう荒みっぱなしで、人間に賜ふことのできる天からの贈答品は、ゴーストのワールドの荒んだ女子たちの心の褻の形質を保つてメタ返し、メタメタ返しとなつて生きていられるのだ。

すつくと立ち上がつて僕が思ったことは、眠りによつて手指が通信機器の画面に触れ、書き溜めたこの小説の本文がかなり削除されてしまつていた、ということだつた。記憶喪失星人に毎日毎夜蹂躪される記憶を忘れてしまふ僕にとつて、これぞ靈魂魔霊病であるうと思われる。その被害は甚大であるが、猫の記憶、友達だつたはずの人々の記憶、みんなの顔、が脳裏に浮かんで涙してしまふばかりで、泣きながら眠つてしまふから涙の跡が顔にくっきり残つて目が覚めるのだつた。あの人もこの人もみんな幻だつたのだらうか。靈魂の魔だけが僕の魂に宿り記憶を削除する靈の病なのか。魔による靈病は魔法で駆逐し白鷺に踏みつけられることで回復するだらうか。僕は前方を見た。勝負運バーガーだ。これは勝負運の肉を使ったバーガーか、はたまた勝負運が食べるためのバーガーか、判然としない。穏便な意識は後者を選び、僕の魂は前者を選ぶ。踏みつけられた蛸が翻つて幸福であつたとしても、笹の外れた存在からしてみれば僕は蛸に慣れてはいなくて、幼生のまま生涯を終えるのであらうからして、耳が木兔になつて鼻は格好良く飛び、カツコウ博士は論文をどうにかしなければならなかつた。斜め上を見ると、千葉が高尾に行く両極端な路線が詭えてあり、横浜へ行きたい気持ちはまだ別の路線に託さなければならなかつた。固く思うのだったが、僕の意識に入つてくるものは、かつ消え、かつ結びて、久しく留まりたる試しが有る

者達だった。ありがたや光線、渦巻きに収斂。僕の幻覚の人々は、踊ったり跳ねたり歌ったり叫んだり泳いだり土を掘ったり空を飛んだり宇宙へ行ったり、さまざまな行為をした。行為とは、生物の内面にある思いや考えを他者が観測出来る限られた機会だ。行為による証明しか他者が当人を観測する手段が無いこの世界だけれども、当人の当事者性は他者からの観測とは関係無いものだし、本人そのものはいかなる他者の言明とも関わりなくそこに在る者なのだ。各家庭並びに子牛買いの皆にて、忘れられることそのものが死である、と教わった者達も含めて下落上に落ち昇っていった。急なことで誰もお悔やみなど述べる余裕も無く、昇降機を使って元の高さまで戻っては、また下落上に落ち昇っていった。

何度も繰り返される悲しみに身を委ねて、自暴自棄な気持ちになり、僕は七袋のシリアル食品を実験する雨に打たれ、涎を垂らしながら垂直になった。無駄なことを話しつつ愉快的気持ちになり、少女の肩に剣玉を斜めに乗せて見事バランスを取り、車を持ち込んでその中で暮らしたりした。僕の中では蛙が今一番来ていて、ぴよこんと跳んだりするのを和やかな気持ちで見守ったりした。夢が幻と現実の狭間に陥ってパランパラン音を立てて崩れていった。超高級好客後期になってその間を歩いていくと、無作法にでんと伸ばされた足がミク口になってマク口になって元通りの湖の大きさになったら、オーブンでホットケーキが出来た証だから、火傷しないように気をつけて、両手にミトンを嵌めて、鉄板を掴み出してしまわなければならないから、いつものように泣き濡れながらそれを行った。僕はもうすっかり悪に染まったのだなと実感し、かつ同時に、頬を伝う熱いものが口に入りそうだと思考していた。

僕の生まれた地域は山の手と下町の混交する怪しげな地域だったと言えるだろう。けれど、子供の頃の僕にとってはそんな状況はわからないままだった。巫山戯たのかと思うような並び立った町並みはいかにも住宅街で、僕がそこで住み育って酔味噲だったことにはならなくて、嬉しいなという気持ちが溢れてくるのだった。引越したことは良い出来事だった。多分、きっと。だからといってそれが全くの善ばかりで負の面が無かったかと言えばそうではない。善が四分に、悪が六分。だいたいそのくらいだろう。当初は善が七分で悪が三分と言ったところだったろうけれど、年月と共に家族達の見通しの甘さ緩さが実態として湧き上がって来た。だから眠っても良いし、眠らずとも良いという説を採択し、おどけた眼（まなこ）で錨を引く夢を見たのだ。金色を放つ夢は、僕の肩を揉んだり、猫の肩を揉んだり、恋人の肩を揉んだり、自給自足した。野菜が生えてきて、洗って食べたり、供物として捧げたり、圧力に耐える訓練を施したりした。無闇矢鱈と食べてしまったり、お腹に良くないこともした。自暴自棄の僕は食べたり飲んだり戻したりしたけれど、摂食障害であることは間違い無かった。歯が胃液で溶けた僕は、ものをよく食べられなくなった。けれど、靈魂魔靈病だからあちこちの病気になったのかどうかは判然としなかった。ただ、チョコレートを挟んだ



ウエハースが美味しかったことは、間違いないことだった。僕は空を見上げて、優しかった頃の母親を思い出した。断片的にだけど、なんとなく覚えていた。その情景は、僕のその後の真実を否定したい気持ちでいっぱいにさせた。だけれども、どんなに僕が僕を救いたかったとしても、僕が生きてはいけけないのだという気持ちを無くしてはくれなかった。僕は生まれてこなければ良かったのだ。だから死ななければならぬ。これは靈魂魔靈病と言える。

空を飛んだのは、久しぶりのことだった。飛行機の窓からは魑魅魍魎があらゆる空間に見え、僕の心と体を蝕んでくる。機内も機外も同じなのだ。奴らは機体も僕の体もすり抜けるのだから。僕は僕で生半可な気持ちではなく泣きながら体の中に侵入した化生を引きずり出しては鍋に入れて熱した。客室乗務員からやめるよう促されても僕はそれをやめることが出来ず、ただ熱したい気持ち、沢庵を齧りたい気持ち、優しさに包まれて宥め賺したい気持ち、などを以ってして対抗するも、僕のお気持ちは許されるものではなく、機上からパラシュートを付けられて放り投げられること明白で、落下しながら目が覚め、夢が夢だったことを知っては涙が溢れている僕が正気を取り戻すことは、目覚めそのものなのだ。と気付いてまた涙した。僕の目に見える世界は幻で現実には僕の内奥に届かない。精神とは心のことなのかわからないまま、僕は壁を伝って歩く。もう身体をもたれかけさせなければ歩くこともままならない。行方知れずの僕は、行方を消失して食される運命に出会ってしまったのだらう。僕の伝う壁が無くなり、床に這ってゆかねばならなかった。僕は〇区域の砂漠を超えなければならない。そこは涙の果てであり、僕の持つ水分を以ってしても池にも川にも為り得なかった。砂漠をラクダで駆け回る映画を思い出しながら僕は現実が作り物より酷いものだと思いつた。仕方なくラクダは買った。水も積んだ。僕はすぐにそれを飲み干してから出発した。ラクダは食べてしまったのもう徒歩で行くしかない。僕の心の中のラクダは幻影となり、僕はその幻に乗って世界を旅する。水の奥、岩に浸透し、マグマに身を焼かれ、奥行きのない平面に張り付き、浴場のまの湯に浸かり、シャンプー泡まみれの頭を湯で流し、浸透圧を計算した上で捨てた覆面のことを忘れ、それを忘れた段階で、僕は僕で無くなった。

研修期間に行われた変身について僕はよく記憶していない。ただ、記憶していない攻撃的な形状に何駅もただ居て鍛えることは出来たので、膝を半分だけ屈め、豊かな人間性と温和な人間性の違いを知る旅を始めた。三歩ほど歩いたところで豊かな人間性と温和な人間性を併せ持つ御老人と出会うことで長い旅は終わり、僕の家というものが出現した。僕は僕の家というものを知らなかった。城や宮殿は幾つか持っていたしそれらに暮らしていた時期があったように思うけれど、それらを家と呼べるような場とは思っていなかった。僕にとつての穏やかな居場所とは関係ない世界の真ん中で跡地として残され、広場としての役目を担っているようだ。けれど僕にとつてそこは家ではなく、暁の戦士とでも言うべき人々が僕を奉るための施設だったよう

な気がするし、そういう公的な場としては、僕に住まわれて家扱いされるのは嫌だったろうと思う。だから僕にとっての全ては今の今、昔の昔、不思議な不思議な物語だった僕の旅した諸所こそが、僕の家だったように思われるのだ。だからなんとなく不穏な気持ちを抱く。そして死にたくなったら死んでもいいと言ってくれる人を見つけて、その人に抱きしめられながら死ねたらいいな、とつい思ってしまうのだ。けれどそんなもの、良くはない。悪しきものだ。僕は悪しきもので、世界を受容することなんて出来やしない。そんなに人間らしく僕は生まれついてない。僕の心を掻き乱すのはやめてくれ、僕の存在は、僕の生きる理由は、そんなもの無いだなんて真実を突きつけないでくれ、たのむ……。ふっと目が覚め、それが夢だったことに気付いた。

悪夢だな、今日の夢は。寝袋の中でぼんやりと目覚め、生地を突き抜けて目に入る光を避けるように左腕で目を覆い、またうとうとと微睡み始める。夢の中の僕の世界はゆったりと、ぼやけながらも温かく、ゆりかごのように揺れて、震度 $\searrow$ を計測した。

日本及び亜細亜東部とロシア南東部の崩壊が終わって、僕の身の回りの人々は半減した。僕は彼らを生かして活躍せしめることが出来たはずだったのに。悔恨の情が湧いて膝を突くと、衝撃で地球は崩壊した。日本を中心に半球 $\searrow$ つに割れた地球は、丁度良い形だったらしく、ヨーヨーになった。星を片手で掴めるほどの巨人にとってそれは良い遊びだったらしい。彼らが地球に糸を巻いてクルクルすると、くるくるは螺旋の模様を左右に齎し、その先に衝撃波を齎す。ぐわん、と鳴った音は大気のある地球ではよく響いたが、宇宙の先には伝わらなかつたろう。全ての災厄は地球人が被り、回されて目が回った地球人の鼓膜を破るのに丁度良かった。世界からミシミシ言う音が聞こえる。僕の存在はこのまま潰れてしまうだろう。最後に貴方に会えて良かったぞ、読者よ。少なくなった地球人は、ヨーヨーの表面にしがみついて生きていけるだろうか。もはやこれまで、と思ったその時に、巨人はヨーヨーに飽きて別の宇宙へボーリングしに行ってしまった。当人からボーリングしたそうな感じをたっぷり満たした「星でボーリング、したい」という言葉を聞いたのだ。だから僕には彼のボーリング愛がわかるし、割れた地球を治す方法がわからないので四苦八苦しそうだった。その時、また違う赤い巨人がやってきて、地球の割れに接着剤を塗ってピタッととくっつけた。すると！ 地球は！ 甦ったのだ！

地球はありとあらゆる災害災厄に見舞われ、残る生物も僅かだった。人間は、一番賢く延命を計ったが、なかなかどうして、なんのなんの、一際貧しい立場に追いやられたと思う。人より熊のほうが強いし、鉄砲の類もあまり残っていない。考えられない事象が荒れ狂った地球が、元の軌道に乗って太陽をまた回り始めたのは奇跡だった。地球は色々なことが変化してしまっただけけれども、もう元には戻らないことも幾つもある、ただ落涙する人々を眺めて気の毒に思った。僕はどんな未来がやってきてもなんともないので。さ

あ、パーティーを開こうじゃないか。僕も君も彼女も彼女も家族たちも、初めて会った素敵な人々と歌って飲んで踊って跳ねよう。食べ物だっていっぱいあるんだ。誰に遠慮することもない、さあ、好きなように楽しんでくれたまえよ。みんなの笑い声、とても嬉しく思う。僕は眺め始める。靈魂の魔を。僕は睨り続ける。魔の靈病を。靈魂は魔となって来場するのだ。君たち私たちもその怖ろしい魅惑に誘われてみないかい？ 今日の深夜0時0分に、全世界が遙か彼方へ移動し、その瞬間全く何事もなかったかのように元の場所に戻ってくる体験を、してみよう。なあに、0コンマ0秒で行って帰ってくるんだ、その間にどんなことがあるうと覚えちゃいられない。だってそうさ。靈魂魔零秒の出来事なのだから。それでもその時君は何かを覚えていられるかな。楽しみだよ。さあ行こう、全てが無となった世界を体験しにね。えも言われぬ終わり方。さあ！

「0.0 靈魂魔靈病 0.0」第三章 成仏の乱舞 完

これにて「0.0 靈魂魔靈病 0.0」、大団円なり 全完